

亜細亜大学

国際関係紀要

第33巻 第1・2合併号

研究ノート

エステル・デイヴィッド『*Book of Esther*』とインドのベネ・イスラエル III
..... 小磯 千尋 (1)

ちゃぶ台と昭和ノスタルジア..... 高山 陽子 (29)

【研究ノート】

エスター・デイヴィッド『*Book of Esther*』と インドのベネ・イスラエル Ⅲ

小磯 千尋

はじめに

今回は『*Book of Esther*』の第3章、エスターの父ジョシュアの章の概要を通して、イギリスから独立後のインドにおけるベネ・イスラエルのありかたを紹介した。動物と意思の疎通ができる特異な才能の持ち主ジョシュアの動物園設立と運営のエピソードが中心であった。ジョシュアとナオミの結婚の経緯が問題となり、彼らはベネ・イスラエル・コミュニティと距離をおくようになった。本章は著者エスターの自伝的内容となっている。多感な少女エスターが様々な試練を乗り越えて、ユダヤ教徒としての自覚に目覚め、イスラエルへの入植を試みて故郷を探す旅を続ける内容となっている。

エスターの子供時代

前章でもエスターの誕生については少し触れられているが、結婚3年目にエスターの母ナオミは妊娠するが、体調不良が続き産婦人科医である義姉ジェルシャと義母シェバベスのもとで過ごす。大変な難産の末にエスターを出産したナオミは体調がすぐれず、母乳も与えられなかった。ユダヤ・コミュニティでは、誕生8日目には命名式が行われるのが習わしだったが、ジョシュアもナオミも娘の名前を決めていなかった。生まれた日がプリム¹⁾

の祭りの日であったので、シェバベスはエステル女王にちなんで「エスター」と命名したいと思いながら、ナオミに言い出せないでいた。ベッドに起き上れるようになったナオミが雑誌を読んでいるとそのページに偶然エステルの写真が掲載されており、それをきっかけにシェバベスが「エスター」の名前を提案して、ナオミに受け入れられた。

体調が回復しないナオミに代わって、エスターはしばらくシェバベスの手で育てられた。そのことでナオミはずっと娘に負い目を感じていたようだ。エスターは痩せて体の弱い子どもだった。エスターの幼少期は鳥や動物に囲まれ幸せそのものだった。6歳で学校に通いだしてからは、彼女のユートピアは終わりを告げた。彼女は学校にあまり馴染めなかった。

続いて、ナオミが教育学で学位を取得するためにバローダの大学に進学することになり、エスターは2年間母と別れて暮らすことになる。エスターは母に見捨てられたような思いに捕らわれる。父ジョシユアのほとんどの時間は動物園に取られ、エスターは祖母シェバベスに託された。しかしシェバベスも産婦人科医の娘ジェルシャのためにエスターにだけかかりきりにはなれなかった。そのためエスターはジョシユアの兄メナチェム一家の家から学校に通うようになる。エスターは伯父の家、祖母と叔母の暮らす家と自分の家の3つを行き来して過ごした。この間、祖母シェバベスの元で家事手伝いをしていた若い未亡人マニ（Mani）がエスターの世話をすることになった。彼女はエスターに民話や都市にまつわる物語伝説、幽霊話や悲劇的結末を迎える恋物語、犯罪者の話などを語って聞かせた。彼女は類まれな語り手であり、エスターは彼女の話に夢中になる。このようにしてエスターは母の不在の寂しさを紛らわせて2年間を凌いだ。

エスターが11歳の時、彼女は祖母シェバベスとシナゴークで行われた結婚式に参列し、そこで初めてラファエル（Raphael）を見かけ、不思議な感情に包まれる。恋に落ちたのだ。

ラファエルは色白で大きな目としっかりとした鼻をもった笑顔の優しい若者だった。彼に会うためにエスターは急に信仰心篤い少女となり、祖母シェ

バベスとシナゴグに通うようになる。ある日ラファエルと彼の両親と顔を合わせ挨拶した後、シェバベスは、「ダンデーカル家はラファエルの祖父と問題を起こしたために、両家の間では婚姻関係が結ばれないようになった」と告げる。多分シェバベスはラファエルがエスターに向ける視線から、二人の間の恋心に気づき、予防線を張ったのかもしれない。

ラファエルの母は英語ミディアムの小学校で校長をしていた。エスター一家はタウンホールで開催された彼女の学校の行事に招待された。そこでラファエルは自ら作曲したダンスの楽曲と歌を披露するとともに、自らのオーケストラでサクスを吹いた。才能溢れる若者であった。

エスターが10年生になると、ラファエルと彼の父親が結婚の申し込みをするために、エスター宅を訪れた。ラファエルは1か月後に音楽を学ぶためにアメリカに発つので、その前に婚約させたいという申し込みだった。胸躍らせたエスターだったが、ジョシュアとナオミはエスターが幼すぎると言って申し込みを断ってしまう。それ以後シナゴグでラファエルを見かけることはなくなり、エスターの信仰心も冷めてしまう。

大学生時代

10年生の試験は何とか乗り切ったエスターだが、学業の不振が続く。教育者ナオミにとっては歯がゆい思いであった。数学の家庭教師についても思うように成績が上がらず、進路をアートに変更する。当時エスターは父ジョシュアの絵画のコレクションや美術本に夢中だったため、画家になる夢を抱くようになる。両親に隠れてアムリタ・シェール＝ギル (Amrita Sher-Gil)²⁾の画集を手に入れ、彼女の絵と人生に憧れる。

かつてのバローダ藩王家の親類のヤシュワントラオの家のゲストとして、バローダ大学の美術学部の3日間の入学試験に臨む。試験3日目に、大学構内でパールスィー教徒の美大生アハセウレス (Ahaseures) との劇的な出会いをする。

緊張で食事も喉を通らず、面接では「なぜ画家になりたいのか?」と訊か

れ、答えられずに泣きだしてしまう。合格は絶望的かと思われたが、入学が認められ、すぐにパローダの大学のホステルに移る。

ホームシックで学業に身が入らないエスターを温かく見守ったのが、パルスィー教徒のアハセウレスであった。入学試験のために初めて大学を訪れ緊張しきっていた時に、エスターは彼に出会い一目で恋に落ちたのだ。ホステルの道を挟んで向かい側に住む彼は、最初からエスターに彼の家に下宿するように勧めてくれた。男だけの7人兄弟の彼の家族も彼女を歓迎してくれたが、ベネ・イスラエルの規範がそれを許さなかった。

慣れない寮生活で学業になかなか身が入らず、エスターは1年目の試験に落第してしまう。教育者である母ナオミには、耐えられない屈辱であった。周りの「失敗は成功のもと」の慰めで、学業を続ける決心をする。再びパローダに戻って来たエスターを見てアハセウレスは喜び、再び彼の家で一緒に暮らさないかと誘う。「結婚を約束していない限り、彼と一緒に暮らすことは無理だ」と答えたかったが、エスターは何も言えなかった。ユダヤ教徒の慣習ではシナゴグで式を挙げた男女だけが一緒に暮らすことが許されるのだ。アハセウレスの提案を受け入れたなら、エスターの両親はショック死してしまうだろう。またエスターはアハセウレスが本当に彼女を愛しているということも信じられずにいた。

大学の規則では落第生はホステルに住むことが許されなかった。エスターは女性のための組織が運営する古い家で暮らすことになる。兄弟親戚であれば男性の出入りも自由な家で、彼女の部屋に同室者の兄弟や親戚の男性が出入りすることにエスターは耐えられなかった。そんななか、大学内の女子ホステルに空きが出て、再びホステルに戻ることができた。そこで同室の先輩女子学生のボーイフレンドだったハマン（Haman）によってエスターへのレイプ未遂事件がおきてしまう。エスターは必死の思いで、両親のもとに逃げ帰る。まっすぐ母ナオミの学校へ向かうが、ナオミの対応は冷たいものだった。エスターの切羽詰まった様子を見て、一旦は一緒に家に帰ってくれた。エスターはこの時人生で初めて、家に入る前に戸口に飾られているユダヤ



1. 戸口に取り付けられたメズーザ。



2. 家に入るときはメズーザに手を触れてから入る。

教徒のシンボルであるメズーザ (mezuzah)³⁾ に触れてから家に入った (写真 1、2)。そうすることによって、今の状況をナオミに説明する勇気を奮い立たせるかのように…勇気をもって、母に事の次第を話し、母にただ抱きしめて欲しかったのだが、ナオミはまるでエスターが汚れた存在であるかのように一瞥し、一言、「ジョシュアに電話しなくては…」と告げた。「ママの膝で眠らせて！」と懇願するも、ナオミは混乱し困惑して冷たい対応をとってしまう。そしてエスターを置いて再び学校へ戻ってしまった。ただ母に抱きしめてもらい、その膝で思い切り泣きたかったエスターは非常に傷ついてしまう。

両親はエスターの詳細な話を聞いたあとも、彼女の妊娠を恐れていた。そのような事態には至らなかったと何度説明しても信じてもらえなかった。生理が来てやっとそれが実証された。バローダの大学に戻る時に、ナオミはエスターに、「ハマンともアハセウレスとも男の子とは一切口をきかないと約束しなさい。ハマンがしようとしたことは忘れなさい。何も起こらなかった

の、覚えておきなさい、何も起こらなかったの。もし誰かにその件について話たり、男の子としゃべったら、私は死を選びます。お前は私の遺体を目にすることになると覚えておきなさい」と脅した。

数年後ハマンの事故死を知らされる。彼の死によってエスターはやっともろもろの恐怖から解放された。そのような過酷な状況下でバローダの大学に戻ることができたのはアハセウレスの存在があったからだった。

ベネ・イスラエルというマイノリティ・コミュニティに生きる彼らは、コミュニティの維持・存続ために、婚姻は単に個人の問題ではなく、コミュニティ全体の問題⁴⁾であった。ジョシユアもナオミも全く宗教的ではなく、ユダヤ教徒としての慣習にも無頓着であったが、レイプ未遂事件後、エスターにユダヤ教徒として同じコミュニティから相応しい花婿をみつけてもらうよう、弁護士の知人に依頼した。すぐに、遠い親戚にあたるベンジャミン(Benjamin)が紹介された。

心にアハセウレスへの想いを秘めながら、不本意ながら親の決めた相手と婚約することになってしまう。何度両親にアハセウレスへの想いを伝え、ベンジャミンとの婚約を断ろうとするも、どうしてもできなかった。ベンジャミンを一目見た時からエスターは彼に嫌悪感を抱く。どうしても彼を好きになることができず、一緒にいることさえも苦痛だった。婚約が成立し、指輪も贈られるが、エスターには彼との結婚はどうしても耐えられなかった。

思い余ったエスターは、ある日母ナオミに、「死んでしまいたい。生きていたくない」と囁いた。エスターは泣きながら必死に、「婚約を破棄したい。ベンジャミンが好きになれない。彼はノーマルではない。彼から来た手紙は奇妙で彼の態度もおかしい」と伝えた。彼女は続けて、「ベンジャミンは私を理解できないし、私は彼が望むような妻にもなれない」と告げた。そして毅然と、「お母さん、私自分で婚約破棄を伝えるから」と言い放った。ショックを受けたナオミを見ながらエスターは、「お父さんにはお母さんから伝えて、私はベンジャミンに直接伝えるから」と言った。二人の間に30分ほど沈黙が続き、ナオミが、「好きなようにしなさい。でも、これはあな

たの問題で、私たちには関わりがないことだから」と言った。エステルが自分でベンジャミンに婚約破棄を伝える勇気などないと思っていたナオミは、「もし自分で婚約破棄を伝えられるなら仕方ない。私はジョシュアに話すから」と提案した。

それからナオミと一緒にベンジャミンの家を訪れ、直接自分で彼に婚約破棄を伝えたエステルは両親から猛烈な非難を浴びる。

母との約束（アハセウレスと口をきいたら母は自殺する）に縛られ、アハセウレスとは会話すらできなくなってしまうが、彼はエステルにとって胸に秘めた永遠の恋人となる。エステルは彼に会うことをずっと望みながら、会うことは叶わなかった。彼は1986年にアメリカで亡くなってしまう。

エステルがベンジャミンとの婚約について悩んでいる時も、アハセウレスは二人の人生を始めようと言ってくれた。エステル自身は一度として彼女の気持ちを彼に伝えることはなかった。「ベネ・イスラエルの良家の子女たる振舞」という規範に縛られ行動できずにいた。

婚約破棄から1年後エステルは修士課程で勉強するために再びバローダに戻る。まっすぐアハセウレスに会うために制作スタジオに向かうが、そこに彼の姿はなかった。彼はバローダを去り、別の女性と別の人生を歩み始めたのだった。

エステルは自らの出自を呪って、「すべてのユダヤ・コミュニティに対して怒りが湧いた。私はなぜユダヤ教徒に生まれたのか？なぜこれほどまでに規定が多いのか、私の考え、私の心、私の自由、私の体、私の希望に対して…」と書いている。

人生の恥部として隠したい結婚

父の信奉者の一人で家に頻繁に出入りしていたヒンドゥー教徒の若者シュリーとの結婚が急に決まる。彼は森林局の役人だった。唯一母公認の男性で、二人で映画に行ったりするうちにプロポーズをされた。両親はレイブ未遂や、婚約破棄をした彼女をもてあましており、1日でも早く嫁がせたかつ

たのだ。当時少しずつインド内の近代的な考えを持つ人の間ではインター・カースト結婚⁵⁾が増えていた。

エスターの両親はシュリーの親に一切興味を示さず、シュリーも両親にエスターとの結婚を報告しないまま結婚する。この時点でエスターが結婚を拒絶したら、両親がコミュニティで顔向けできないような状況になっていた。両親はとにかくエスターをすぐにでも結婚させようと必死で、シュリーのことをよく知ろうとしなかった。

結婚式当日花婿シュリーが現れずエスターは動揺する。そんな中、普段から心臓に問題を抱える父ジョシュアが心臓発作を起こす。「お父さんを殺す気？」と母ナオミに囁かれる。エスターの両親を尊敬していたシュリーは、彼らの尊厳を傷つけないために、最終的に式場に現れた。シュリーは自分の両親の承諾も祝福も受けないまま結婚を決めたことに罪悪感を感じていた。彼は不機嫌なまま式に臨み、レセプションに参加することも写真に写ることも拒絶した。

形式的な婚姻登録と署名をすませ、祝賀ムードもないまま、エスターはシュリーの赴任地に移り住む。森の中の官舎は美しかったが、家庭内は冷え冷えとしていた。日々の料理作りもまともにできないエスターにシュリーは苛立ち、二人の結婚生活は徐々に破綻していく。

エスターは1年後に妊娠する。身重のときにジョシュアが咽頭癌に倒れ、エスターは看病もままならなかった。ナオミは異教徒と結婚した娘を人の目を気にするゆえに、娘が父親の看病をすることから遠ざけていた。

ジョシュアの手術は成功したが、声帯を失いしゃべることができなくなってしまう。失意のジョシュアを救ったのは兄のメナチェムであった。のちにジョシュアは人工声帯をつけて話せるようになる。ジョシュアは復活して、動物園で新たな人生を始めることができた。

そんななか、シュリーは父親の葬儀のために2か月家を空けた。戻ってからの彼は以前にも増して落ち着かず、怒りっぽくなっていた。暴力的にさえていた。彼にしてみたら、エスターが諸悪の根源で、彼女と結婚したこ

とで彼の家族は不幸に見舞われたと思い込んでいた。続いて彼の母親も亡くなった。その時エステルは第2子を身ごもっていた。エステルが彼を置いてアフマダーバードに帰りたいと言ったときに、暴力が爆発した。彼はエスターを部屋に閉じ込め、「あと5人子どもを産ませてやる。お前の美貌もそのプライドも台無しにしてやる」とまで言い放った。

しかし、二人は外目には幸せそうなカップルを演じていた。

そんなある日、密猟者が鹿を殺す事件が起こった。妊娠中の雌鹿で傷ついた腹からはへその緒のつながった胎児が虚ろな目を開けていた。昔ジョシュアが雌鹿を救えなかった話を思い出したエステルはこの小鹿を救おうとする。シュリーに懇願して、なんとか命を助けてあげて欲しいと訴えるも、「家に入っている。私の仕事の邪魔をするな」と怒鳴られる。しかし、エステルはどうしてもその場を動けなかった。歯ぎしりして怒っているシュリーに腕を引っ張られ、強引に立ち上がらされる。このとき、シュリーに恐怖を感じたエステルはこれをきっかけに離婚を決意する。この時は、上の娘を置いて、下の息子だけを連れて家出同然で両親の元に戻る。

それからのエステルの孤軍奮闘ぶりには目を瞠るものがある。娘を取り戻すために裁判を戦い抜き、奪還に成功する。下の息子の脳の障害のために、医者や理学療法士を訪ね、娘の奪還のために裁判所に通い詰めた。手元に戻った娘は生気を失い、「おしの白鳥」のようであった。子どもの養育費などを一切要求しない離婚であったため、エステルの経済状態は最悪で、家族3人の生活費のほとんどを両親に頼らざるを得なかった。

すぐに、エステルは子どもたちと3人の小さな部屋を借り、質素ながら快適な暮らしを始めた。彼女は彫刻家として活動し始めた。少しずつ新聞や雑誌に美術批評を書き、美術教師として教壇にも立つようになった。また、旅行社の電話オペレーターとしても働き、経済的自立を目指した。週末にはボランティアでスラムの子供たちに美術を教えた。『インディアン・エクスプレス紙』に書いた長い美術評論は高い評価を得ることができた。ある日、『タイムズ オブ インディア紙』の編集者から連絡があり、新聞への

連載を打診される。彼女は書くことの楽しさを見出し始めていた。そうした中で、多くの機関から彫刻や美術史、美術鑑賞について教授するよう要請があった。また、スラムでの活動に興味を示したスペインのイエズス会教団から、恵まれない子供たちのための美術教育の可能性を調査するプロジェクトを任された。これは生涯にわたって彼女のライフワークとなる。政府の文化協会からは祭典のコーディネーターを任せられ、それがグジャラート政府の美術アカデミーの会員への推薦へとつながり、のちに5年もアカデミーの会長を務めることになった。彼女の仕事、活動の1つ1つが次のステップへとつながり、大学で学んだことを最大限に活かすことができたといえる。

母との確執

婚約破棄、離婚などが原因で、エスターと両親との関係は決して良いとはいえなかったが、両親に子供たちを預けて互いの絆を深めさせた。シュリーとの離婚に不満のナオミは、折あるごとにエスターの身勝手さをなじっていた。

そんな中、エスターはナオミの健康状態が思わしくないことを子どもたちから知らされる。教員を退職したあとも、個人的に英語を教え続けていたナオミだったが、発熱や吐き気、腹痛に悩まされ、身体に黒いしみが広がるようになった。ナオミは医者診察を拒み、誰も彼女が癌に侵されていることを想像することすらできなかった。3年に及ぶ断続的な症状のあと、ある夕方彼女は意識を失い、病院に緊急搬送される。そして、ICUに入ってから15日目に息を引き取ってしまう。ナオミが息を引き取る5日前、突然意識がはっきりし、1時間ほど座って見舞い客らと話げできた。エスターは母の心情を思い、人目を避けるように病室をあとにして外で時間をつぶした。再び母が意識を失ってしまったら、きちんと別れができないと思い返したエスターは病室に戻る。母の手を握るエスターの目には涙があふれた。ナオミは無表情でエスターを見つめ、その先にいるべき人の姿を探していた。母との別れの時を思い、悲しみに満ちていたエスターの心が怒りでいっぱいになっ

てしまう。最期のときに及んでも、ナオミが発した言葉は、「シュリーはどこなの？彼のところに戻りなさい」だった。ナオミの思いを汲んで、ジョシュアたちが、シュリーに連絡するために電話へ走った。握っていたナオミの手を放して、エスターはジョシュアを追いかけ、「もし、シュリーをここへ呼ぶなら、私はすぐ病院を出て、永遠にあなたの前から姿を消します」と告げた。手にした受話器を置いてジョシュアは、「ナオミの遺志を尊重しないのか？」と訊いた。エスターは母の遺志を無視し、シュリーを母の最期のときに呼び寄せなかった。親戚の人々の冷たい視線を感じながらも、エスターは頑として譲らなかった。そんな時も唯一従妹のマルカ（Malkha）だけはエスターの味方だった。マルカはどんなときでも、エスターに寄り添い続けた。

以前から、ナオミはエスターにシュリーの元に戻るよう説得していた。娘のことを心配しての母の思いを理解しながら、娘の置かれた状況を理解しようとしめない母にエスターは苛立っていた。

死の床ではベネ・イスラエルの年長者たちがジョシュアの許可を得てから、ヘブライ語の祈りを捧げた。敬虔なユダヤ教徒とはいえなかったナオミの最期はユダヤ教徒として締めくくられた。

ナオミの遺体を葬儀のために自宅に運ぶと、ベネ・イスラエルの女性たちが集まって、死装束を縫っていた。エスターが母の遺体にココナツミルクで儀礼的沐浴を施すと、ズボンと長袖の死装束が縫いあがっていた。手には香りのよいイヌハッカが振りかけられ、刺しゅう入りの白いハンカチが握らされた。死装束には樟脳が置かれ、両目はエルサレムの土で覆われた。一族の男児が最後の儀礼を執り行うことになっており、エスターの幼い息子がその任を負わされた。年長者がエスターの耳元で、「母がユダヤ教徒なら、子どもたちは自動的にユダヤ教徒になるのだから、息子に律法を教えなさい」と囁いた。ナオミの遺体が墓に納められ、エスターが一握りの土を振りかけると、自分の過去の一部もともに葬り去ったように感じられた。土ですべて覆われると母と交わした約束からやっと解放された気がしたのだった。

母との約束に縛られ、連絡も取れなかったアハセウレスに母の死後手紙を書いた。しかし、彼からは何の返事もなかった。彼は自分の新たな夢に向かってアメリカに旅立っていた。1965年に別れてから、しばらくエスターの夢にアハセウレスが夜ごと登場した。

1986年の夏、再びエスターの夢にアハセウレスが現れた。彼は白い死に装束を着て黒い馬にまたがっていた。エスターが手をのばそうとしても届かず、彼は去っていった。その背中ではまるで茨の中を潜り抜けてきたかのように傷つき、血が流れていた。翌朝、エスターは彼の死を知る。彼は寝ている間に亡くなったのだという。

ナオミが亡くなったあと、ジョシュアは彼女の後を追うことを望んだ。ナオミなしでは生きられなかったのだ。それから彼は酒に溺れ、酔っては泣いて眠りに付くということを繰り返していた。エスターは父とともに暮らし、彼の面倒をみることを決める。彼女にとってもジョシュアは避難場所だった。エスターは子どもたちを連れて父の家に戻る。彼女は家族の再構築を試みたのである。

ユダヤ教徒としての自覚

長い間彼らが暮らした家は借家だった。ジョシュアの動物園の仕事からの退職を機に家を建て、1階にジョシュア、2階にエスターと子どもたちが暮らし、台所は共通とした。エスターは父の世界中から集まる客人たちに料理を作ってもてなした。エスターは公立大学の美術学部で教鞭をとり、ジョシュアは生涯ヒル・ガーデン動物園の名誉相談役に任命され、毎朝8時に動物へ出かけ、2時には家に帰り、昼食前に軽く食前酒を飲み、一休みしてから子どもたちと過ごすことを日課とした。ジョシュアはアジアライオンと動物のアルビノに関する本を執筆していた。アジアライオンに関する本はインド政府出版局から出版された。アルビノの原稿は彼の書棚に置かれたままだ。

ジョシュアの天性の人を魅了する性格は世界中からユニークな人々を彼

らの家に引き寄せた。中でもシュロモ (Shlomo) との出会いは、彼ら一家に大きな影響を及ぼした。シュロモはイスラエル出身の 80 歳を超えた痩せた人物だった。夜 8 時にジョシュアが夕食前のウイスキーの 1 杯を用意すると、シュロモは凍り付いて、「私はいただけません」と告げた。彼は東ヨーロッパ訛りの英語で、「エスター、今日は安息日だと知っていますか?」と尋ねた。「もちろん、今日は金曜日です」とエスターが答えると、シュロモは安息日のロウソクはどこかと尋ねた。もしエスターたちが安息日の祈りを行わないなら、シュロモは彼らの家で飲食はできないと言う。ジョシュアは、「申し訳ないが、私たちはユダヤ教の慣習に従っていないので、祈りは行いません。でも、インド文化の伝統では、我が家で何も食わずに去ることはできません」と答える。するとシュロモは、「もし私にお宅で食事を摂らせたいのなら、私に安息日の祈りをするを許してください」と提案する。ジョシュアは喜んでこの提案を受け入れたが、「私は宗教を信じません。信じるのは人類愛です。すべての人間は平等です。敢えて言うなら私は自然崇拝者です」と語った。安息日の祈りのテーブルを支度するように言われたエスターは戸惑う。幼い時に祖母シェパベスを手伝ったことはあったが、それは随分昔のことだった。シュロモの指示で、清潔な白いテーブルクロスをテーブルに広げ、安息日用のロウソク立を準備した。全員でテーブルの周りに立ち、シュロモがローマ字で書いてくれたヘブライ語の祈りの言葉をエスターが唱えた。シュロモ自身も決して敬虔なユダヤ教徒ではなかったが、安息日の祈りは気持ちを落ち着かせ、ユダヤ教徒としての自覚を深めてくれると語る。またシュロモはベネ・イスラエルの歴史についても話してくれた。ユダヤ教徒らしい慣習といえば、戸口に飾られたメズーザだけだったエスターの人生に、シュロモは新しいユダヤ教徒としての自覚をもたらしきっかけを与えてくれた。1 か月後、イスラエルから小包が届く。シュロモがジョシュアの家に聖書がなかったため、わざわざ送ってくれたのだ。これはエスターにとって自らのまた、子どもたちのアイデンティティに関して考える機会を与えてくれ、シナゴークに戻る勇気を与えてくれた。まず、シナゴーク



3. 馬車で地上に降り立つエリヤフ・ハンナビのポスター

の結婚式に参加し、それから祭礼に、そしてエリヤフ・ハンナビ (Eliyahu Hannabi)⁶⁾ (写真3) の祭礼に積極的に参加するようになった。時にはジョシュアがコミュニティの主賓としてシナゴークに招かれることもあった。少しずつ、コミュニティと彼らの溝は埋められていった。

イスラエルへの入植

エステルは幼少期に祖母のシェバベスが寝物語に語ってくれた話をよく思い出した。終わりのない妖精の話、最後には伯母のジェルシャを嫁がせることができず、イスラエルに送ることもできなかったことへの後悔が語られた。「伯母さんがイスラエルに行くなら、お祖母さんも一緒に行くの?」と訊くと、「行きたいよ。預言者エリヤフが避難したシナイ山を見たい。山の岩に触れるだけでもいいから…」、「でもジェルシャはインドを去ることはないだろうよ。もし彼女が同意したら二人でイスラエルに行くんだけどね」とかの地への思いを語った。

晩年、シェバベスが寝たきりになった時、エステルがもろもろの外部圧力に押しつぶられそうになっているのを見ると、彼女はエステルの手を握って、「ここには何も無いよ。イスラエルに行きなさい」と彼女の心にイスラ

エルへの憧れの種を植え付けた。イスラエルはエスターが辛い時の心のオアシスとなっていた。毎年、「来年こそはエルサレムへ！」と自らに言い聞かせていた。子どもの頃に家に偶然立ち寄った絨毯商人エリ・ジャコブソン、そして歴史家のシュロモなどがエスターの心にあるイスラエルへの憧れをより強くさせていた。親戚の何人もがイスラエルに入植し、折にふれ写真を送ってくれた。写真に写っている地はエスターを過去から解放してくれる「約束の地」となっていった。

絨毯商人エリ・ジャコブソンがヒトラーのチェコ侵攻時にイスラエルに亡命し、キブツ (kibbutz)⁷⁾ で育ったという話を聞いた幼い (当時7歳) エスターには、「キブツ」は天国のように響いた。エリは、ジョシュアにこのままインドに住み続けるつもりなのかと尋ねた。ジョシュアにとっては動物園がすべてであり、イスラエルへの入植はありえないと答えと、エリはエスターに向かって、「このままインドに暮していたら、ユダヤとして生きることが困難になるのでは？すでに十分にインド化されているようだ」と言った。むっとしたジョシュアは、「それが何か問題ですか？私の妻も母もインド式のサリーを着て、インド式のアクセサリーを身に付けていましたが、ユダヤ式の慣習に従ってきました。着るものはインド製かもしれませんが、心はユダヤです」と反論した。ジョシュアは続けて、「私は進化論支持者です。あなたも我々が文明化されたサルだということを否定できないでしょう？」と笑いながら言った。エリは笑いながらも執拗に、「娘さんの将来について考えたことがありますか？特に彼女の結婚について。ヨーロッパやアメリカでは若いユダヤ人が結婚相手に選ぶのはユダヤ人とは限りません。彼女をイスラエルへ送るべきです」と提言した。

ジョシュアは亡くなる1年前、エスターにイスラエルに入植するよう繰り返し要請した。シュバベスが語っていた「乳と蜜の流れる国」へ行けば、エスターや子供たちの明るい未来が約束されていると信じていたのだ。

エスターはイスラエル定住を試みたが失敗した。決してイスラエルが嫌いなわけではなかったけれど・・・エスターのイスラエルへの旅は巡礼のよ

うであった。それは彼女の過去を消し、新しい人生を始めるために不可欠であったといえる。インドをアハセウレス、ハマン、パローダ、アフマダーバードを、陰口や猜疑心の強い親戚・知人、コミュニティを忘れる助けとなった。しかし、彼らは決して彼女の過去を忘れないし、彼女が忘れることも許さなかった。つまり彼女はただインドから、自分の過去から逃げたかったのだ。

ムンバイーからカイロ経由でテルアビブ空港に着くと、南にある移民専用のホステルに送られた。そこには肌の色が黒、白、茶色、黄色の世界中から来たユダヤ教徒がいた。町には自動ライフルを肩にかけた若い兵士が大勢いた。彼女はついに、「乳と蜜と血の流れる国」に來たのだ。

移民ホステルで割り当てられた2部屋で見たテレビの戦争のニュース映像は、エスターを震撼させる。夜中に戦闘機の爆音で目が覚めることもしばしばだった。

エスターは自分自身にインドから逃げ出すためにさまざまな理由付けをしていたが、イスラエルに来て、インドではユダヤ教徒であるということを恐れることなく暮らしていたことをあらためて認識した。ホロコーストを生きのびた移民から話を聞き、インドではユダヤ教徒ということで被害を受けたことはなかったことに感じ入った。ムスリムの支配者さえもベネ・イスラエルの先祖の尊厳を守ってくれた。

エスターはまずヘブライ語習得のために努力を続けた。ほかの移民の家族からフォークソングやフォークダンスも習った。またイスラエルの料理の数々を味わい、習う機会を得た。

イスラエルで職を得るためには、ヘブライ語ができることが必須条件であった。ヘブライ語が話せないエスターにとっては仕事をみつけることは不可能といえた。移民サポートのソーシャルワーカーが提案してくれた仕事は、死海のほとりにある製塩工場の事務職か幼稚園の美術教師だった。国際的に展開する企業の秘書の仕事などを期待していたエスターだが、ヘブライ語ができないと何も始まらないことを思い知らされる。イスラエルで生きる

ためにはヘブライ語が第一条件なのだ。

インドレストランを始めようかと思い、メニューなども考え、スパイスなどを購入してみたが、いい料理人をみつける手立てもなく、失敗したと思うと事業を興す勇気もなかった。なんとかイスラエルで経済的に自立するための手立てを考え続けた。エステルにユダヤ教徒としての自覚のきっかけを与えてくれたシュロモに相談するために、コンタクトを試みたが、結局彼との再会は叶わなかった。

経済的自立に向けて思い悩んでいたエステルだが、イスラエルにいる間にできるだけイスラエルを見ておこうと決心して、博物館や史跡や宗教的聖地などを精力的に訪問する。シナイ山にも登り、祖母シェバベスのためにSと彫った小石を岩の間に埋めた。

エステルはインドのグジャラートから持参した刺しゅうを売ろうと試みた。ソーシャルワーカーが仲買人を紹介してくれた。テルアビブに住むロシア生まれのヤエル（Yael）という女性だった。刺しゅうは買ってもらえなかったが、美術鑑定家であるルース・ダヤン（Ruth Dayan）という女性を紹介してもらった。彼女は入植たちに工芸品を作る仕事を提供していた。彼女がデザインを提供して入植たちが刺しゅうや工芸品を作るのだ。エステルは彼女と一緒に働きたいと思ったが、ヘブライ語が話せないのでは無理だと一蹴される。ただし、エステルが刺しゅうをしてそれを納品するのなら、その刺しゅうを購入してくれると約束してくれた。ルースはグジャラート刺しゅうを買ってくれそうな人のもとにエステルを連れて行ってくれたが、1つも売れなかった。しかし彼女とエステルはアートという共通のテーマで親しい友人になった。バスターミナルまで送ってくれた彼女にエステルは、「私は死海の製塩工場の事務員にも、幼稚園の美術教師にもなれない」と泣いて心情を吐露する。彼女は、「いつか道は開けるから、それまでヘブライ語を勉強しなさい」と励まし、エステルの持っていた刺しゅうすべてを1万シェケル（約40万円）で買ってくれた。

家に戻ると、郊外の小さな一軒家が売りに出ていると教えられる。その家

は鉄のノッカー付きの大きな木のドアがついた家で、エスターが幼い頃住んだ家を思い出させる造りだった。中庭がありそこは緑や青、白のモザイクタイルで覆われ、四方に部屋がつながっていた。まるでアラビアンナイトの世界に迷い込んだような錯覚に陥った。アパートが提供されるのが普通であり、一軒家は珍しい物件だという。これを紹介してくれたのはインドからの入植者のソーシャルワーカーだった。ここで彫刻の制作スタジオも始めることもできるから、すぐ買うべきだと言われた。

何気なくエスターが、彼に、「これはイスラエル人の家だったの？」と尋ねると、彼は苛立った様子で、「アラブ人の家です」と答えた。恐怖を覚えたエスターは、「買えないわ」と即答する。彼は、「もしこの国で暮らしたいなら、そんな情感は捨て去るべきです。ここでの暮らしに慣れないと！」と言い放った。それから無言で、エスターを彫刻家のもとに案内してくれた。石の彫刻を続ける女性を見ているうちに、エスターの中で突然何かが動いた。自分が本当にやりたいことは何なのか？今は無目的でフワフワしている自分。彼女がやりたいことはインドでスラムの子どもたちに美術を教えているような類のことだった。でも、ここでは？と様々な思いが錯綜した。

エスターはイスラエルに来たら、魔法の杖で彼女の人生が劇的に変わるような錯覚にとらわれていた。ユダヤ教徒として生きるのなら自分はどこでも生きられるはずだ。別にイスラエルにこだわる必要はない。彼女にとってイスラエルは色のついていないモザイクタイルの床で、暴力、火事、血、救急車のイメージで汚され、常に緊張で張り詰めたものとなっていた。エスターは個人、家族、コミュニティからの何らかのサポートが必要だった。が、イスラエルで従妹や叔父や叔母、古い家族共通の友人と会ったが落ち着かなかった。エスターと彼らの間には共通するものがなかった。インドにいるときも同じだった。ただ一人従妹のマルカを除いては。

エスターはアフマダーバード、父の元に帰るべきだと決断する。父ジョシュアの元が一番安心できる場であった。父をインドに一人にしておくことはできなかった。父が生きている限りは傍にしよう。インドに戻る準備をし

ているとやっとエスターの心は落ち着いた。

父の死後

ジョシュアは1989年に亡くなった。エスターは父の死を嘆く間もなく、彼の遺した動産・不動産の処理に追われた。家は骨董品屋の様相を呈していた。ジョシュアが収集したコレクションはアフマダーバード市の博物館とスンドルヴァンに寄贈した。彼らは受け入れてくれ、ジョシュアの名前を冠した自然史博物館に展示してくれた。

エスターの人生にGが登場するまで、彼女は父の死から立ち直れなかった。Gはゴーレム (Golem)⁸⁾ のGである。なぜなら彼はエスターが創造したゴーレムであったからだ。彼女はユダヤ教徒の夫によってユダヤ教徒的な人生を送りたいと望んでいた。またGはインド人の妻を必要としていた。エスターはユダヤ教徒であることの意味を追いかけていた。

ゴーレムは最初はアメリカから、続いてフランスから頻繁にアフマダーバードのエスターを訪れた。彼は芸術家肌で自由奔放かつ快活な人で、エスターの子どもたちは彼のことが好きだった。エスターとゴーレムは手紙のやり取りをして、互いに理解を深めていった。1990年のある日、彼はパリから深夜2時に電話をかけてきて、エスターに「一緒に暮さないか」とプロポーズをする。エスター46歳の時である。返事を保留していたエスターだが、娘は20歳、息子は17歳になり、二人ともイスラエルのキブツで暮らすことを決めており、結婚への障害は何もなかった。エスターも子どもたちと一緒にイスラエルに行くつもりではいたが、あまり気乗りしていなかった。当時彼女は大学の職も辞し、最初の小説を書き始めていた。ゴーレムは手紙で、「ずっと探し求めていた妻として、恋人として、友人として母として姉妹としての女性像を君の中に見いだした」と書いてきた。エスターは6か月間返事をできずにいた。ゴーレムはアハセウレスとは似てはいなかったが、エスターを安心させる素敵な笑顔を持っており、どこか懐かしい遠い親戚のように感じられた。エスターは悩んだ末、結婚の申し込みを受け入れる。エス

ターは子どもたちとともにパリへ飛び、子どもたちはパリ経由でイスラエルへ向かった。

思い出の詰まった家を片付けている時、エステルはただただ悲しかった。家が彼女に何か語りかけているような気がしたが、その時は何か分からなかった。それを解読するのに10年近くかかってしまった。——それはそこが彼女の「故郷 (home)」だというメッセージだった。

ゴーレムはヒトラーがエッフェル塔に鉤十字を掲げた時に少年だった。父親と兄弟はアメリカに移住しており、彼らに合流するために母親の運転する車で陸路ポルトガルに向かい、そこから船でニューヨークへ渡った。母の高価なアクセサリ類が船上で盗まれてしまう。それを阻止できなかったこと、二人の従妹が強制収容所に送られて生還できなかったことがゴーレムの生涯の心の重荷となっていた。

エステルにとってゴーレムと共に暮らすことは、ユダヤ教徒としての新しい発見の連続だった。ヨーロッパのユダヤ教徒と異なり、インドのユダヤ教徒はホロコーストの真の意味を理解しているとは言えなかった。もちろんそれについて聞き、本を読み、記録映画を見てはいたが、実際に経験したかしないかは決定的な差であった。エステルの問題はユダヤ教徒としての生き方で、決して身体的な脅威ではなかった。エステルは完璧なユダヤ教徒の妻の役割をこなそうと努めた。家の戸口にメズーザを飾り、安息日を守ることが基本だった。エステルが彼の家の戸口にメズーザが取り付けられていなかったため、取り付けたいと告げると、ゴーレムはその必要性が理解できないようだった。ゴーレムからするとエステルが盲目的に儀礼に従っているように見えた。エステルはイスラエルにいる娘にメズーザを依頼して取り付けの際、ユダヤ教徒を少なくとも10人招いてお祝いしたいと伝えるが、ゴーレムはそれを拒んだ。メズーザを取り付けたことは彼らだけの秘密で、友人知人に伝える必要はないと言われ、エステルは動揺する。

安息日は異国に暮すエステルにとって心身ともに癒される大切な日であっ

た。ロウソクに火を灯し、神に祝福を乞い、家族の安寧を祈願する。エスターの脇に立つゴーレムはいつも落ち着かない様子だった。エスター自身は安息日の労働に関しては厳格ではなかったが、日ごろ忙しくしているゴーレムに安息日だけは仕事を忘れて二人でゆっくり過ごして欲しいと望んでいた。

エスターはユダヤ教の祭りをできる限り祝おうと努めていた。ユダヤ教の祝祭が生活の中心となっていた。ゴーレムは儀式に対してずっと懐疑的であった。彼にはエスターが救済としてユダヤ教徒の伝統や儀式を必要としていることが理解できなかった。この齟齬が二人の関係に暗い影を落とすことになる。

ゴーレムは自分が自らの奴隷であるかのように働いた。毎日18時間以上働いていた。ホロコーストの生存者として、命の代償として富を社会に還元しなければいけないようだった。一緒に人生を築こうという申し出は守られず、エスターは孤独に苛まされていた。エスターは一人の時間を有意義にするために、パリ中を見て回った。エスターは夫の元で安全で守られてはいたが、心は満たされない思いだった。イスラエルに幻滅した子どもたちはパリに戻って来て、しばらく一緒に暮らすことになる。その後、娘は婚約者とともにパリに住み、息子はインドの先祖の家に住むことを決めた。

1994年、インドに息子を訪ねてパリに戻る途中で、グジャラートでベスト⁹⁾が発生したことを知り、エスターはパニックになる。心配したエスターが息子に電話をすると、彼は冷静で何も気にしていない様子だった。後ろ髪をひかれる思いでパリに戻ると、4日間で37人がベストで亡くなり、324人が入院したというニュースが流れ、ヨーロッパにも警戒が発せられた。インドからの国際線はキャンセルされ、インドからの出国も禁止された。亡くなった我が子を抱えた父親の写真が繰り返し報道され、その写真はエスターに大きな衝撃を与えた。彼女はネズミとノミが頭から離れなくなってしまう。ある夜エスターは息子の暮すアフマダーバードの家がネズミに占拠され、大量のネズミたちが息子のベッドの下から這い上がって来る夢にうなさ

れ、叫び声をあげた。徐々にエスターの心は蝕まれていった。

エスターは地下鉄に乗ることも、エレベーターに乗ることもできない状態になってしまう。周りの忠告でエスターは精神分析医にかかり始める。精神分析医にペストへの不安を語り、家族の歴史を語るセッションを続けるうちに、エスターは文章を書く気力が戻り、スケッチが描けるまでに快復した。これがきっかけで一族の歴史や、流行り病で亡くなった大叔父について調べ、それをまとめて小説『Walled City』を書き始めた。

エスターのゴーレムとのユートピアは長くは続かず、6年目に破綻することになる。エスターはジーンズ、シャツ、コート、靴を脱ぎ捨て、サーリーを身にまとう。サーリーをまとった途端に彼女はかつての自分に戻った気がした。6年前にフランスに家庭を築くためにすべてを投げうってインドを後にした時の自分に・・・彼女はそんな自分が自分の中に生き続けていたことに安堵する。アフマダーバードに戻る時が来た、「故郷」に・・・

考察とまとめ

この章では、多感で早熟な少女エスターと両親、特に母親との確執、永遠の恋人との出会い、レイプ未遂事件、望まぬ婚約とその破棄、ヒンドゥー教徒との結婚と離婚と、エスターの多難な人生が語られる。その過程で、ユダヤ教徒としての自覚を深め、イスラエルへ入植するも失望しインドへ戻り、大切な父を見送る。続いて、ユダヤ教徒の妻としてパリでの6年の生活を送るも、孤独と夫との埋められない溝に悩み、インドのペスト流行が引き金となって精神を病んでしまう。最後は自分の居場所、故郷はインドのアフマダーバードのあの家だと悟るところで物語は完結している。

この小説を通して、マイノリティとしてインドに暮すベネ・イスラエルの生き方を見てきたが、コミュニティを維持するための規範が、エスターという感受性豊かな女性の生き方を縛ってきたことが分かる。エスターの両親は互いの意志を貫いて親の反対を押し切って結婚したために、ベネ・イスラエ

ル・コミュニティと距離を置かざるをえなくなった。インド社会において、父ジョシュアはインド初の動物園を開園・維持し、国民栄誉賞を授与されている。また、母ナオミは英語教師として教鞭をとり、尊厳をもってインド社会で生きることができた。学業的には優秀とは言えなかったエスターだったが、彼女もまた独自の審美眼を有し、美術評論や美術を講じることでインド社会に足跡を残すことができた。ベネ・イスラエルの人々はインド社会においても進歩的で、子女の教育にも常に前向きであった成果といえよう。

勝又は、ユダヤ教とユダヤ人が将来置かれるあらゆる事例に対応するために必要とされるのは教育である。子ども大切にすることとは、教育をすることである。教育を通して強靱な思考力を培うことである。子どもと教育はユダヤ教の宗教理念の根幹にある（勝又 2016:322）と言及している。インドのベネ・イスラエルでもこの理念は忠実に守られてきた。マイノリティ・コミュニティでありながら、軍隊や建設業、教育、医療の分野で、インド社会の重要な役割を担い続けてきた。

市川によると、イスラエルの入植者たちの中にも階層が生まれていたことが分かる。「イスラエル建国の中心となったのは東欧出身の社会主義的なユダヤ人だった。移民の受け入れにおいては、政府が生活への適応促進制度を設け、各地に設置された集合住宅へ出身地ごとに集団入居させた。こうしてイスラエルという移民社会においてユダヤ人同士がお互いの異文化性を直接経験することになった。出自の違いには優劣の感情が付随したため、アシュケナジ系がエリート層を形成した」（市川 2015:124）。インドからイスラエルに入植したベネ・イスラエルの人々は、イスラエルでもマイノリティとして扱われることとなる。インドでは高い教育を受け、希望する職についていた人々が、イスラエルにおいてはヘブライ語がネックとなり、単純労働への就業を余儀なくされるのが現状である。

エスター・デイヴィッドが自らのルーツを5代前に遡って本書を書き、その本のタイトルを『エスターの書 (Book of Esther)』としたことを考察してみよう。ユダヤ教のプリムの祭りの日に生まれたことから、「エスター」と

名付けられた彼女は、おりに触れユダヤ民族の危機を救った女王エステルのお話を周りの大人たちから語り聞かされていたことだろう。『*Book of Esther*』は旧約聖書の『エステル記』¹⁰⁾と同一のタイトルとなっている。本作のエスターは『エステル記』のエステルと自分を重ね合わせて半自伝的小説を書き上げたと推測できる。レイプ犯のハマンは『エステル記』でユダヤ人抹殺を王に進言する高官ハマンと同名となっている。『エステル記』のエステルと自分の波乱万丈な生き方のシンクロニシティを意識した本書のタイトルであることが推測される。

ベネ・イスラエルの人々の間では、インドを「母なる地 (motherland)」, イスラエルを「父なる地 (fatherland)」と呼んでいる。生活様式・慣習、言語など、多くの面で長年にわたりインドの在地社会に深く組み込まれていたベネ・イスラエルにとっては、特にヒンドゥー教徒の影響が大きくみられる。第一章のバトシェバはイギリスの傭兵として戦場に赴いた夫の無事をヒンドゥー寺院で祈願し、雨ごいのためにヒンドゥー教のバジャン（神への讃歌）を歌っていた。エスターの祖父にあたるデイヴィッドはインドの民族主義運動の立役者ティラクとの交流を通して、自らインド人としてのアイデンティティに目覚めていく。続くジョシュアの世代ではユダヤとしてのアイデンティティよりも独立インドの一員として社会に溶け込み、重要な役割を果たしていく。エスターの5代にわたる一族の歴史はインドと切っても切り離せないが、ユダヤとしてのアイデンティティについての意識には濃淡があることがわかる。

本章でも、インド化を心配する絨毯商人に、ジョシュアが「母も妻のインドのサーリーやアクセサリーを身に着けていますが、ユダヤ式の慣習に従ってきました」と反論する場面があるが、ベネ・イスラエルの人々はインドのマハーラーシュトラのコンカン地方やグジャラートのアフマダーバードの食文化や衣文化の影響を受けている。言葉もマラーティー語やグジャラーティー語を話している。イスラエルに入植する際のハードルとされるヘブライ語も年配のベネ・イスラエルのイスラエルへの入植を躊躇させる要因の一つと

なっている。

イスラエルの国民のアイデンティティ形成に大きな役割を果たしたものは、公用語としてのヘブライ語と軍隊である（市川 2015:124）と、言われるようにイスラエルにおけるヘブライ語の重要性がエスターにとっても入植のハードルであった。

また、エスターがイスラエル入植を試みた 1980 年代には、占領地で住民の抵抗運動インティファダが興り、パレスチナによるテロも頻発していた。イスラエルのパレスチナとの抗争にも失望したエスターは、インドに一人残してきた父のこともあり帰国を決意する。

ベネ・イスラエルの人たちはヨーロッパのユダヤ教徒とは異なり、インドにおける長い歴史のなかで迫害を受けることがなかったとしばしば語られる。同じユダヤ教徒とはいいいながら、そのバックグラウンドは異なり、特にホロコーストを経験したヨーロッパ出身のユダヤ教徒と、インド出身のベネ・イスラエルの人々の間には理解しがたい一線があったようだ。それは、パリでのエスターとゴーレムの結婚生活にも超えられない溝となって影を落としていた。

パリでのゴーレムとの生活では、必要以上にユダヤ教の儀礼にこだわり続けたエスターであったが、それは自らのユダヤ教徒としてのアイデンティティを確立するために必要だったのだ。エスターの幼少期、祖母はユダヤ教徒として伝統を守り続けたが、彼女の両親は世俗的なユダヤ教徒として、安息日も守っていなかった。ジョシュアはユダヤ教徒というよりも自ら博愛主義者を自認していた。

自らのユダヤ教徒としてのアイデンティティを探し求め、心の故郷を探し続けたエスターは、最終的にそれがインド、アフメダーバードの我が家であることに気づくのである。

注

- 1) アダル月 14 日に行われる祭り。これはアケメネス朝ペルシア、クセルクセス王時代にその臣下ハマンがたくらんだユダヤ人迫害を、スサのユダヤ人家庭から王宮に召された王妃エステル (Esther) の機転と進言によってくい止めた事件にちなむ。プリムとは「くじ」の意味である。ハマンがユダヤ人虐殺を実行する日をくじによって決めたことに由来する。祭りでは、エステルが王宮入りするきっかけとなった宴にちなんで、仮装をして楽しむ。シナゴークではエステル記を朗読する。
- 2) ハンガリー出身のインドの画家。父はパンジャーブ出身のシーク教徒でサンスクリット語とペルシア語の研究者、母はハンガリー人でオペラ歌手だった。8歳で一家をあげてインドへ移住。16歳で絵の勉強のために母親とパリへ移る。1932年にインドへ帰国し、コルカタを拠点にインドの伝統技術を取り入れながら近代絵画の創作を続ける。タゴールやジャミニ・ロイとともにベンガル・ルネサンスの担い手となる。28歳で夭逝。
- 3) 「門柱」の意。ユダヤ人の家屋、シナゴークに設置される。入り口側に、斜めに取り付けられ、部屋に入るたびに手を当てて祈る。
- 4) 1990年には、アメリカでユダヤ人と他の人種や宗教に帰属する人との混合婚の割合が52パーセントに達したことで一挙に注目されるようになった。これはアメリカのユダヤ人社会の存続を危ぶむ声となって、イスラエルのユダヤ人から申告な同化現象として厳しく批判されている。ユダヤ人社会が内部から崩壊する脅威として強く意識されている (市川 2009: 261)。
- 5) 宗教、カーストの異なる男女が行う結婚のこと。
- 6) ベネ・イスラエル・コミュニティで最も信仰されている預言者。エリヤフは信者を助けるために頻繁に地上に降り立つと信じられている。子どもの割礼の儀式に立ち会い、年に1度過ぎ越し祭には各家庭を訪れるとされる。
- 7) 農業に基づいたイスラエルの共同体で、集産主義的協同組合ともいえる。キブツとはヘブライ語で「結合」、「集合」の意。最初のキブツは1909年に設立された。
- 8) ユダヤ教の伝承に登場する自分で動く泥人形。「ゴーレム」はヘブライ語で「未完成のものを意味し、作った主人の命令だけを忠実に実行するロボットのような存在とされる。
- 9) 1994年、インド西部の都市スーラトで発生したベストは、全土に広がり死者53人、患者は5000人を超えてパニックをもたらした。
- 10) 旧約聖書『エステル記』(*Book of Esther*) 抜粋
バビロン補囚後、キュロス2世によって補囚が解かれたあとも、そのままバビロニアにとどまったユダヤ人も多数いた。そうしたユダヤ共同体の一員

であったエステルは、若くして孤児となり、いとこのモルデハイに養育された。当時の国王クセルクセスが開いた酒宴に、王妃ワシュティは出席を拒絶して、国王の怒りを買ひ、王妃の地位をはく奪される。クセルクセスは新しい王妃を選ぶために宴を開き、ペルシア中から集めた美女の中から並外れて美しいエステルを選ぶ。エステルはユダヤ共同体を離れて王宮に入る。モルデハイはユダヤ人としての出自を明かさないようにエステルに助言する。クセルクセス王の殺害を謀る宦官の会話を耳にしたモルデハイは、エステルを通じて王に進言する。エステルは、モルデハイの名で王にそれを通告し、陰謀を未然に防ぐことができたことが宮廷日記に記された。

しばらくして、高官ハマンが自分に対して敬礼をしないモルデハイに立腹し、モルデハイとその民族全体の絶滅をクセルクセス王に忠言する。くじの結果アダル月の13日に全ユダヤ人が殺害されることが公示され、ペルシア中のユダヤ人を絶望に陥れた。そこでモルデハイは、王宮にいるエステルに対して、ペルシア中のユダヤ人の解放と救済のために、彼女自身が王のもとに行って、自分の民族について寛大な処置を王に対して求めるように伝言した。しかし、王からの許可なく、自ら王のもとに上がることは死刑に処せられることであるとエステルは恐れる。しかし、意をけって、王妃の衣装をまとい王のもとに上がり、自分が準備する酒宴に王とハマンを招待する。ハマンはなおも自分に敬意を払わないモルデハイに立腹し、モルデハイを吊るすための柱を用意して酒宴に備えた。その晩、偶然、宮廷日誌に目を通したクセルクセス王は、かつてモルデハイによって陰謀が未然に防げたという事件を思い出す。エステルは、宴にハマンと共に出席したクセルクセス王に対して、自分と自分の民を救ってくれるようにと嘆願する。王は直ちにその望みを聞き入れ、ユダヤ民族大殺害の首謀者であるハマンは、自らがモルデハイを処刑するために用意した処刑台で処刑されることになる（勝又 2016：118-119）。

参考文献

- 市川裕（2009）『ユダヤ教の歴史』山川出版。
 ——（2015）『図説ユダヤ教の歴史』河出消防出版。
 勝又悦子、勝又直也（2016）『生きるユダヤ教——カタチにならないものの強さ』教文館。
 Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage* —— Ritual, Art, & Life-Cycle, Marg Publication.

●本稿は、JSPS 科学研究費・基盤研究（C）「近現代インドのユダヤ教徒のライフ・ヒストリーと「国民国家」」（課題番号 18K00988, 代表：井坂理穂、2018 年度～2021 年度）のもとで行われた研究の成果の一部である。本プロジェクトのその他の成果として、井坂理穂「植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第 26 号（2022 年刊行）も参照のこと。

【研究ノート】

ちゃぶ台と昭和ノスタルジア

高山 陽子

はじめに

郡上八幡のレトロアート館（さんぷる工房、1991年創業）には、ひっくり返されたちゃぶ台がある【写真1】。これは食品サンプルの特性を活かし、ちゃぶ台の上に飛び散る味噌汁や酒、畳の上にこぼれる醤油や白米を再現したものである。ちゃぶ台の背景には、昭和の茶の間のイメージをなぞるかのよう、ブラウン管テレビや壁掛け時計、ペナント、黒電話、木彫りのクマなどが並ぶ。

郡上八幡は1990年代から観光土産として食品サンプルの販売を始め、2000年代に入ると食品サンプル制作体験を開始した〔朝日新聞2008年9月7日〕。食品サンプルの創始者・岩崎瀧三の生まれ故郷である郡上八幡は、1933年に日本初の本物の模擬天守（天守が実在しなかった城に建てられた天守）が建設されたことでも知られる【写真2】。岩崎は、大阪市北区に岩崎製作所を創立し、そごう百貨店のレストランでオムライスの食品模型を展



写真1 レトロアート館



写真2 郡上八幡城

示し、食品模型の商品化を成功させた。戦時中は食品模型の製造が中止されたが、1950年、大阪で事業を再開し、1952年にイワサキ・ビーアイの前身となる岩崎製作所東京支店を大田区に開いた。いわさきグループは創業以来、食品サンプル業界のトップとして君臨し続けている。

高度経済成長期、全国規模で飲食店が増えるにつれて、食品サンプルの需要も高まり、食品サンプルを扱う企業が増加した。デパート最上階のレストラン店頭に置かれた華やかな食品サンプルは、昭和の家族団らんを象徴するものとなった。他方で、1970年代に開業したすかいらーくやロイヤルホストなどのアメリカのダイナーを参考にしたファミリーレストランには食品サンプルではなく、鮮やかな写真を掲載したメニューブックが使われた。

バブル崩壊後、飲食産業が停滞する中で食品サンプルの発注も減少したが、食品サンプルの需要は、店頭のショーケース用に代わって個人の製作体験として増えていった。食品サンプルの材料が蠟から現在の合成樹脂に変わったのはこの時期である。旭食品サンプル（1963年創業）は、2008年、愛知県常滑市の料理店で食品サンプル制作教室を行い、好評を博した〔中日新聞 2008年7月30日〕。体験教室開催当時は親子連れを対象としていたが、次第に大人向けの制作体験と見なされるようになっていった。訪日外国人数が急増した2010年代には、元祖食品サンプル屋（いわさきグループ）が店を構える合羽橋に外国人観光客が訪れ、食品サンプルの制作体験を行った。料金は1人数千円で、レタスと天ぷら2品であれば1時間程度で完成し、即日で持ち帰りができる【写真3】。

食品サンプルは製作体験だけではなく、昭和の生活再現展示にも用いられるようになった。東京都区立の郷土資料館や郷土博物館（以下、郷土博物

館とする)には昭和の展示として、茶の間とちゃぶ台が置かれる【写真4】【写真5】【表1】。食品サンプルは、その隆盛期が高度成長期であり、アナログ性という特性がデジタルデバイス普及以前の昭和のイメージと合致する。食品サンプルやジオラマなどの模型によって再現された昭和は、不均質性を含むアナログの世界である。純喫茶のクリームソーダが醸し出すレトロさは、その厚手のガラスが生み出す不均質性にある。クリームソーダは、ミニチュアフード製作教本の必須作品であるが、ガラス容器

もシリコンモールドで個別に製作するため不均質な仕上がりとなる。こうしたミニチュアフードや食品サンプルのように、模型は本物そっくりの再現ではなく、ある特徴を強調し、重要性の低い特徴の破棄、すなわち、デフォルメ化が行われる。

1983年10月28日の『朝日新聞』の「街角にさえるニセの技」という記事では、渋谷で食品サンプルを作る須藤四郎氏(当時56歳)の作品が紹介された。鉄火重の食品サンプルのキャプションには「本物よりもわずかにど



写真3 食品サンプル体験作品



写真4 杉並区立郷土資料館



写真5 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

【表1】 東京都区立郷土博物館におけるちゃぶ台展示

区	名称	開館年	ちゃぶ台
足立区	足立区立郷土資料館	1986 年	改装中
荒川区	荒川区立荒川ふるさと文化館	1998 年	ローテーブル
板橋区	板橋区立郷土資料館	1972 年	なし
江戸川区	江戸川区郷土資料室	1965 年／2000 年	茶の間
大田区	大田区立郷土博物館	1979 年	○
葛飾区	葛飾区郷土と天文の博物館＊	1991 年	◎
北 区	北区飛鳥山博物館＊	1998 年	なし
江東区	江東区深川江戸資料館＊ (公益財団法人江東区文化コミュニティ財団)	1986 年	座卓
品川区	品川区立品川歴史館	1985 年	改装中
渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館＊	1975 年／2002 年	○
新宿区	新宿区立新宿歴史博物館	1989 年	◎
杉並区	杉並区立郷土資料館	1989 年	◎※1
墨田区	すみだ郷土文化資料館	1998 年	なし
世田谷区	世田谷区立郷土資料館	1964 年	なし
台東区	台東区立下町風俗資料館＊	1980 年	改装中
千代田区	日比谷図書文化館		
中央区	中央区立郷土資料館	2022 年	なし
豊島区	豊島区立郷土資料館＊	1984 年	なし
	豊島区立昭和歴史文化記念館 (昭和レトロ館)	2022 年	◎
	豊島区立トキワ荘マンガミュージアム	2020 年	○
中野区	山崎記念中野区立歴史民俗資料館	1989 年／2020 年	○
練馬区	練馬区立石神井公園ふるさと文化館＊	2010 年	○
文京区	文京ふるさと歴史館	1991 年	座卓
港 区	港区立郷土歴史館	2018 年	なし
目黒区	めぐろ歴史資料館	2008 年	なし

実地調査（2023 年 5 月から 9 月に実施）により筆者作成

◎ちゃぶ台＋食品模型 ○ちゃぶ台のみ ※1 特別展

＊トータル・メディアによる設計

ぎつく華やかに」と記されている〔朝日新聞 1983 年 10 月 28 日〕。模型にはしばしば人々の幻想や理想が加えられるため、模型が表現する「理想の過去」は、否定的な情報を後景化する。こうした点を踏まえて本稿では、博物館における模型の使用を整理した上で、近代化とノスタルジア、ノスタルジアの可視化を考察する。なお、以下、本稿では食品サンプルを含めた広い意味で食品模型という言葉で統一する。

1 博物館における模型の使用

古くから作られてきたミニチュアハウス（人形の家）や建築模型などの縮尺模型には実用性が伴っていた。例えば、子供用玩具として 17～18 世紀のドイツやオランダで作られたミニチュアハウスは、もとは持ち運べる商品見本という用途があった。人々のまなざしが家の内部へ向かうにつれてミニチュアハウスは次第に精巧さを増し、大人も鑑賞するようなレベルになっていった。また、ミニチュアハウスは単なる玩具ではなく、子供に社会性を習得させるための教材と意味もあった〔多木 2008〕。

建築模型は大聖堂や宮殿などの大型建造物を建設する上で必要なものであり、日本でも数は少ないが、松江城天守雛形【写真 6】や大洲城天守雛形のように天守の模型が確認できる。ただし、天守雛形は天守修復に際して制作されてきたが実物が少なく、詳細はわかっていない。松江歴史館に展示される天守雛形は、寛永年間（1624-1644）に大工頭の竹内右兵衛が制作したとされる。これは、平面 40 分の 1 に対して高さ 30 分の 1 となっており、高さが強調されている。鑑賞者はこうしたデフォルメに気付かないことが多い

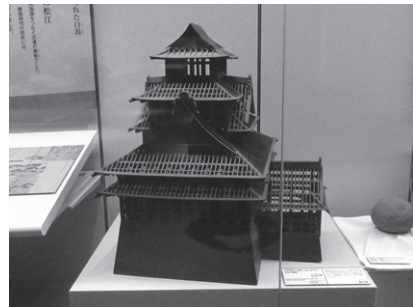


写真 6 松江城天守雛形

が、ある情報の強調は模型の持つ特性の一つなのである。

博物館における模型展示は18世紀末にイギリスで始まる。宝石商でありアマチュア博物学者であったウィリアム・ブロック（William Bullock、1773-1849）は、1795年、リヴァプールに珍しい品々を集めた博物館を開いた。彼のコレクションは1809年、ロンドンのピカデリー通りに移され、ロンドン博物館とパンサリオン（London Museum and Pantheon）となった。ブロックはリンネ協会会員として生物学の研究を行っていたことから、野生動物を自然界に生息するような状態で見せたいと考え、はく製と植物の模型、背景画を合わせた展示を行った。これが今日的博物館のジオラマ展示の始まりとされる。こうした展示方法はイギリスやアメリカの自然史博物館で導入された〔南 2002:70-71〕。

日本では明治初期に上野公園に博物館に設置されて以来、博物館における展示方法の議論が続いた。1899年、動物学者の箕作佳吉（1858-1909）は『東洋学藝雑誌』の「博物館ニ就キテ」において博物館の目的を、国家の宝物を貯蔵保管する、宝物を以て教育する、高等学術の進歩を計るという3点を掲げ、人々の関心を引くために標本を用いた展示を行うべきであると以下のよう

例ヘバ鳥ノ如キ剥製ノモノヲ棚上ニ置クラ以テ足レリトセズ其自然ニ生活スルノ状態ヲ示シ海岸ニ住ム者ハ海岸ノ景色ヲ造リ出シテ（シカモ美術的ニ）鳥ノ標本ヲ或ハ舞ハシメ或ハ岩上ニ止マラシメ或ハ巢ヲ營ムノ模様ヲ示シ而ノ雛鳥ノ標品ヲ活キタル如クニ造リテ其内ニ納メ…各學科ノ標品ニ付キ普通ノ人ノ見テ以テ快樂ヲ感じラズ識ラズノ間ニ其標品ノ教ユ可キ智識ヲ吸収スル様ニ意匠ヲ凝ラシテ造リ出サル可ラズ〔箕作 1899:318〕

棚橋源太郎（1889-1961）は、このようなジオラマ展示を自然史博物館だけではなく、教育博物館や郷土博物館にも取り入れるべきだと主張した。棚

橋はジオラマを背景画と複数の動物の模型を組み合わせた「生態展示」について、『眼に訴へる教育機関』（1930年）において、欧米の科学博物館にて誰にでも仕組みが理解できるように、実物や模型が用いられている例を紹介している。例えばミュンヘンのドイツ科学工業博物館やロンドンの科学博物館では「観覧者がボタンを一つ推すか、ハンドルを回せば直ぐに動くやうになって居る」として、「短い時間に豊富な知識を容易く会得し、然かも明確な知識にして持ち帰へることが出来る」〔棚橋 1930:264〕と述べている。

民俗博物館では、「乾燥無味な古い陳列法の反動」として、舞台装置のような照明と背景の前に互に関連する標品もしくは模型を合わせて配置する「ジオラマ式陳列」が生まれたという。この劇場的な「組合せ陳列」は、「博物館を一般大衆に興味あるものたらしめたいと云う努力を示すもので、人類若くは動物の生活状態を知らしむる上に、最も有効な方法たること疑いない」〔棚橋 1930:264-265〕と称賛する。「ジオラマ式陳列」には様々な大きさが可能であるが、どの場合にしても、全てを美しく、具体的に示すものであるゆえに、展示物の単純化が行われる。ロウやセルドイド、石膏、張り子、板紙などの素材から作る植物などの補助物は、しばしば凝りすぎる傾向があるが、これは「却って具合がよくない」という。小規模な博物館で用いることを考えれば、出来合いの品に色を付けるだけで十分だとする〔棚橋 1930:266-270〕。

もともとジオラマはダゲール（Louis Jacques Mandé Daguerre、1787-1851）が1822年に公開した舞台装置のようなものであった。ダゲレオタイプという写真撮影法の発明で知られるダゲールは、当時は舞台装置家であり、1820年代にパリとロンドンで遠近法を強調した20 m以上の絵の展示を行った。ロンドンのジオラマ館には人力で回転する円形の観客席が設けられ、観客は光の当たり具合によって様々な見え方をする巨大な絵に熱狂した。こうした見世物としてのジオラマは明治期の日本に導入された。1890年5月20日の『東京朝日新聞』にフランスのダゲールが発明した「二重畫」は、一枚の絵が「二様の趣を現はす實に我國に於ては未曾有の繪畫」〔東京朝日新聞



写真7 山崎記念中野区歴史民俗資料館

1890年5月20日]として紹介された。同日の新聞には、南北戦争のヴィックスビルグの戦いを描いた「日本パノラマ館」が浅草公園に開館したという記事が掲載された。このパノラマは高さ20間（約36m）、周囲80間（約145m）で、観客の近くにサーベルなどの実物を陳列し、その背後に絵

画を置いたもので、「實物との差別を分かつに苦しましむる妙あり」と表現された[東京朝日新聞1890年5月20日]。パノラマやジオラマは明治期の日本人のまなざしに大きな影響を与え、新しい娯楽となっていくた[吉見2016:305]。

1975年5月に開館した秋田県立博物館は縄文早期の岩井堂洞窟のジオラマを筆頭として9つのジオラマを導入した[南2002:69]。その後、総合博物館には縄文・弥生時代のジオラマが置かれるのが一般的となった【写真7】。堅穴建物のモデルとなったのは、1951年、関野克(1909-2001)によって復元された登呂遺跡の復元住居である。1943年に登呂遺跡が発見されると静岡市は既存の商工奨励館を改修して郷土博物館を建設する計画を立てるが、戦争により中断し、戦後の1947年、発掘調査とともに博物館建設計画が再開した。登呂遺跡発掘調査は戦後日本の「文化国家の建設」を象徴するものとして全国的に注目され、破格の予算が付けられた。建築史家の関野は弥生時代の住居復元を一任され、「想像復原」、すなわち、学術的な根拠が不十分であるため想像を交えて復元することを試みた[青柳2010]。

関野が復元した建物が1969年に焼失した後、登呂遺跡公園には多くの弥生時代の建物が復元された【写真8】。萱葺の復元様式は各地の堅穴建物の復元に取り入れられたが、近年、縄文時代の堅穴建物は土屋根であった可能性が高いことが指摘され、三内丸山遺跡では土屋根の堅穴建物も再現された



写真8 登呂遺跡



写真9 三内丸山遺跡

【写真9】。戦後の昭和における社会の教科書には弥生時代の遺跡として登呂遺跡が掲載されていたが、21世紀になるとそれに代わって吉野ケ里遺跡【写真10】の記載が増えていった。



写真10 吉野ケ里遺跡

堅穴建物の模型展示における難しさは、天守の復元の事例を思い出させる。1931年に鉄筋コンク

リートで建てられた大阪城天守は、その後の復興天守ならびに模擬天守のモデルとなり、1933年、八幡山に建てられた郡上八幡城天守は山にそびえる天守という城のイメージを作り出した。戦後、地域のシンボルとして再建された天守などの城郭建築は、観光資源となる一方で、誤った歴史観を伝える危険性が繰り返し指摘されてきた〔読売新聞 1991年4月21日〕。

縄文および弥生時代の堅穴建物の模型についても同様であり、堅穴建物の構造や当時の生活をわかりやすく示す一方で、その時代のステレオタイプ化を促す。それは、模型制作には常に情報の取捨選択というプロセスが伴うために、棚橋の指摘のように展示の「単純化」が起こるためである。郷土博物館におけるちゃぶ台も、ある意味ではステレオタイプ化された昭和の再現で



写真 11 岐阜城



写真 12 吉野ヶ里遺跡マネキン

ある。竪穴建物とちゃぶ台は郷土博物館における模型展示の代表であるが、前者にはマネキンが配置され、縄文・弥生時代の平和な日常生活が醸し出されている【写真 11】。後者には食品模型などによって日常生活が再現されているものの、マネキンが置かれることはない。ちゃぶ台に座るべき人物は鑑賞者自身である。これが鑑賞者により具体的に昭和ノスタルジアを喚起させるのである。

2 郷土の二重性

明治以降の日本では、東京へ移住した人々によってノスタルジアが形成された。ノスタルジアと「故郷」について論じた成田龍一（1998）は、「故郷」の語りがさかんに作られた時期として以下の3つの時期を挙げている。すなわち、1880年代、1930年代前半、1960年代後半から1970年代前半である。これらは「「故郷」という感情を軸にして共同性が、国民国家の変化にともない変わっていった」〔成田 1998:23〕時期である。

1930年代は郷土に関心が集まった時期であり、失われる地域性や江戸の伝統文化への憧憬は多くの郷土玩具愛好家を生み出した。香川雅信は、郷土玩具への愛好趣味は「明治期、失われていく江戸文化への憧憬として」〔香川 2003:120〕始まったと述べる。郷土玩具の父と呼ばれる清水晴風（1851-

1913) は、自身が集めた「手あそび品」を 1891 年から 1913 年にかけて『うなるの友』という冊子で紹介した。当時、清水が所属していた竹馬会の内田魯庵(1868-1929)や竹内久遠(1857-1916)、坪井正五郎(1863-1913)などの文化人も、清水のコレクションに好意的なまなざしを向けた。日露戦争期には「国粹主義的傾向が高まり、民族意識の高揚が叫ばれる」ようになり、「“古くて素朴なもの”や“日本的なもの”に対する市井の人々の関心も高まった」[加藤 2008:5] という。

1930 年代に郷土玩具収集ブームはピークを迎える。他方、「アチック・ミュージアム」を設立した渋沢敬三(1896-1963)や柳田國男(1875-1962)からは、郷土玩具は学術的な研究の対象には相応しくないと見なされた[香川 2003:122-123]。こうした中で童画作家の武井武雄(1894-1983)は 1930 年、『日本の郷土玩具 東の部・西の部』を著し、日本中の郷土玩具を網羅的に紹介した。武井が郷土玩具にこだわった理由は、近代以降の大量生産品の玩具に対する批判からであった。郷土玩具の収集を通して「歴史的に形成されてきたローカルな価値を再評価しようとした」[加藤 2008:20] という。

武井は『日本の郷土玩具 東の部』の序にて以下のように述べる。

斯く民族の消長と有機的奇縁を以て結ばれ來たつた童玩に對して、一般は「たかがおもちゃ」の言葉を冠して蔑視し、最も好意を寄せる少數の蒐集家さへ自ら「がらくた」と卑下して、單に蓄へてその稚趣を楽しむの範圍に停り、狹少な同趣味者仲間においては全く郷土玩具の何たるかさへ理解されず、日本民族の成長と何等關係のないものゝ如く忘却され來つた。…

西歐の諸國は各地の博物館及びプライベートコレクションによつて採録された有史以前より十九世紀當初迄の郷土玩具に關する文獻に依つて見るも、極少數の傑作を除いては單に常識的な模型の範圍を出でず、實生活の寫實的縮小であつてこれを滋味ある童玩の世界に再生させてゐないものゝ甚だ多きに過ぐるのに驚くのである [武井 1930:1-2]。

武井はここで、郷土玩具は学術的な対象から排除されたことへの遺憾の意を表すとともに、日本の玩具が単なる縮小模型ではなく「滋味」のある作品であることを主張する。多様なベクトルにデフォルメ化されるために日本の郷土玩具には深い味わいが備わるが、残念ながら郷土玩具制作におけるデフォルメ化にどのような信仰や価値観が横たわっているかはまだ研究が進んでいない。

ところで、郷土は郷土玩具や郷土料理のように「ローカルな」という意味では故郷と同じであるが、「郷土愛」というイデオロギー性の高い文脈で用いられる点で故郷とは一線を画する。中国で古くから故郷を意味する「郷土」という言葉が日本で普及したのは明治期であった。中村正直（1832-1891）は、1871年、サミュエル・スマイルズ（Samuel Smiles）著のSelf-help（1851）を『西国立志編』として翻訳した中で郷土という言葉を用いた。ただし原著に「郷土」に相当する言葉はなく、中村が「英語の意識にあたり、高尚な響きをもつ漢語として“郷土”を採用した」〔島津 2010:34〕という。

郷土という概念はその後、学校教育に取り入れられる。1891年の「小学校教則大綱」に「尋常小学校ノ教科ニ日本地理ヲ加フルニハ、郷土ノ地形、方位、児童、日常目撃セル事物ニ就キテ端緒ヲ開キ…郷土ニ関スル史談ヨリ始メ」と記され、郷土を教材とすることが定められた。1930年代には文部省と民間の郷土教育連盟（1930年結成）が村の自力更生のための郷土教育運動を始め、その理念に賛同した教員たちが運動に携わり、各地で〇〇郷土会や〇〇郷土研究会が設立された。

こうした郷土教育運動に対して否定的な立場を示したのが柳田國男である。柳田は1910年、新渡戸稲造宅で「郷土会」を創立し、高木敏雄と協力して1913年に雑誌『郷土研究』を創刊した。その間、柳田は遠野で佐々木喜善から聞いた話を『遠野物語』を著し、柳田民俗学を確立していった。柳田は1900年代初頭から郷土という言葉を用いていたが、当時は「明治以前の」という曖昧な概念として用いていた。郷土研究会に対して柳田は研究者が自身の郷土の特性のみに着目する偏狭な視点を「自家撞着」とであると批判

した。こうした偏狭さが、1930年代の日本において「郷土愛」のイデオロギー化を招いたのである〔室井 2006:110-112〕。

柳田民俗学が郷土研究から始まっているにも関わらず、その後の民俗学では福田アジオと宮田登、千葉徳爾が郷土について言及した以外には、ほとんど顧みられることがなくなった〔室井 2006:99〕。学問の世界から姿を消した郷土という言葉は、郷土料理や郷土芸能といった「ローカルな」という意味と、郷土愛といった「ナショナルな」という意味の二つを持つようになったといえる。

日本で最初の郷土博物館がどこだったかははっきりしないが、早期の郷土博物館の例として遠野郷土館がある。遠野は柳田國男の『遠野物語』で有名になり、郷土史家の鈴木重男（1881-1939）が1924年に私設博物館を建設した（1927年焼失）。公立の郷土博物館では1934年、有栖川宮記念公園に設立された東京都郷土資料陳列館があり、江戸時代の珍しい品々が展示された。この陳列館は戦争で荒廃した後、収蔵品は小金井公園の武蔵野郷土館に引き継がれた。小金井公園には1940年の紀元二千六百年記念行事で皇居前広場に建てられた光華殿が移築され、1954年に武蔵野郷土館となった。その後、1991年に閉館し、現在では光華殿は江戸東京たてもの園のビクターセンターとして使用されている。

江戸たてもの園の展示設計を行った丹青社は、杉並区立郷土資料館や港区立郷土歴史館、豊島区立トキワ荘マンガミュージアムなどの設計も担当した。トータル・メディア開発研究所は葛飾区郷土と天文の博物館、台東区立下町風俗資料館、江東区深川江戸資料館などを担当した。立体的な空間展示を得意とする会社で、模型も数多く使用している。

東京都区立の郷土資料館として最初に開館したのは1964年開館の世田谷区立郷土資料館である【写真13】。世田谷代官の大場家の敷地に前川國男（1905-1986）による設計で資料館が建設された。敷地を提供した大場信統（1876-1964）は土木技師であり、大正期に下高井戸線（現・東急世田谷線）の誘致した人物としても知られる。その他、玉川電気鉄道溝ノ口線（現・



写真 13 世田谷区郷土資料館

田園都市線)、小田原急行鉄道(現・小田急小田原線)、帝都電鉄(現・井の頭線)などの鉄道の開通が世田谷の宅地化を促した。このような近代の世田谷の歴史や民俗は区民から寄贈された史料で示され、近世までの様子は区内で発掘された出土品や模型で展示された〔朝日新聞 1964 年 9 月 8 日〕。

区立の郷土博物館は郷土ゆかりの場所に建つことが多い。板橋区立郷土資料室は 1969 年、板橋産業文化会館 7 階に開設され、1972 年に赤塚城(1456 年築城)跡のある都立赤塚公園に移築され、郷土資料館となる【写真 14】。練馬区立石神井公園ふるさと文化館も石神井城跡に立つ郷土博物館である【写真 15】。石神井城の築年は不明であるが、城主であった豊島氏は 1477 年、太田道灌(1432-1486)に滅ぼされる。戦後、中世城郭として石神井城址の発掘調査が行われ、出土品は文化館に展示されている。また、中野区立歴史民俗資料館は山崎喜作邸、杉並区立郷土資料館は嵯峨侯爵邸、渋谷郷土博物館は白根全忠邸、飛鳥山博物館は渋谷栄一郎が基盤となっている。目黒区のめぐろ歴史資料館は目黒区立第二中学校の校舎を使用している。2018 年、



写真 14 赤塚城本丸跡



写真 15 石神井城址

リニューアルオープンした港区立郷土歴史館は白金台駅のすぐ隣に位置する【写真 16】。数多くある公立の郷土博物館の中でも屈指のアクセスの良さと広さを誇る。もともと港区立郷土資料館は、1982 年、港区立三田図書館の 4 階に置かれたが、資料館としての設備が十分ではなかったため、1990



写真 16 港区立郷土歴史館

年代から移設が検討されてきた。1938 年に竣工した国立公衆衛生院の建物を 2009 年に港区が取得した後、改修工事を施し港区立郷土歴史館となった[港区郷土歴史館 2021]。

東京都区立の郷土博物館はその郷土史を示しながらもナショナルな歴史の語りからは逸脱しないように作られている。郷土博物館は、千代田区や中央区のように図書館の一角に置かれたものから、6 階建ての 1 階から 4 階までを占める港区郷土歴史館のような大規模なものまで多様であるが、その地域の古代から近現代までの流れに沿っている点は共通する。古代ではナウマンゾウの化石のレプリカや黒曜石の石器、貝塚、竪穴建物の模型などの展示があり、農具や祭具などの実物を通して庶民の生活を示すようになっている。宿場町や農村の風景はジオラマを用いて表現されることが多く、昭和に入ると生活再現展示が用いられる。戦前から進んだ東京市民のモダンな生活が、戦後の日本各地に広がったことは、「三種の神器」やちゃぶ台の普及から確認できる。近代的な生活様式が均質化に向かったために、博物館における模型による生活再現展示は多くの人々にリアリティをもって迎えられた。昭和ノスタルジアは急速な近代化やグローバル化に対する反発ではあるが、それを示す方法がステレオタイプ化されているのは現代社会の一つの皮肉であるといえよう。

3 ノスタルジアの可視化

昭和ノスタルジアに関する研究〔片桐 2007; 寺尾 2007; 市川 2010; 浅岡 2012; 日高 2014; 高野 2018 など〕によると、昭和ノスタルジアは 1990 年代に形成された昭和 30 年代への集合的記憶と要約できる。1960 年代ではなく、「昭和 30 年代」という言葉を用いる理由には、昭和 30 年代のイメージが共通するものであること、昭和 35 年以降の 1960 年代になると日本全体が大きく変わり、牧歌的な昭和の香りが失われるというストーリーが共有されるためという〔浅岡 2012:164〕。

本来あったものが失われる感覚はノスタルジアの根本をなす。ノスタルジアという言葉は、17 世紀、故郷を離れた喪失感から心身に不調を来したスイス人傭兵たちの症状を指すものとして生まれた。当時、スイス人医師が使ったギリシア語の *nostos* (家へ帰る) と *algia* (苦痛) を組み合わせた *nostalgia* は、現在のような過去を懐かしむという意味ではなく、情緒不安定や抑うつ状態を指すものであった。この症状はスイス人傭兵に限らず、ヨーロッパ各地の軍隊でも広く発生したため、故郷を離れた人々が感傷や郷愁といったノスタルジアを抱くことが一般的であると見なされるようになる〔デービス 1990〕。

Boym (2001) は、ノスタルジアが個人的な郷愁というよりも近代化などの社会の変化に伴う公共的な脅威 (public threat) であると指摘する〔Boym 2001:5〕。現代におけるノスタルジアは、資本主義がもたらす格差や生活全般に及ぶ均質化への反発とも受け取れる。例えば、格差のない社会主義期を懐かしむ社会主義ノスタルジアは、体制転換後の旧社会主義国で様々な形で現れた。ドイツでは、東 (Ost) とノスタルジア (Nostalgie) を合わせたオスタルギー (Ostalgie) という言葉が使われ、中国やブルガリアでは「紅いノスタルジア」 (Red Nostalgia)、旧ユーゴスラビアでは「紅い影」と呼ばれた〔Light 2000; Ghosee 2004; Velikonja 2008; Lin 2015 など〕。

社会主義時代のモノを展示する私設博物館には、プラハの共産主義博



写真 17 DDR の世界



写真 18 シュタージ博物館

物館（Muzeum komunizmu、2001 年開館）やドレスデンの東ドイツの世界（Die Welt der DDR、2017 年開館）がある【写真 17】。内部にはコンズム（KONSUM、東ドイツの消費者協同組合が管理するスーパーマーケット）や美容院、薬局などが再現されたが、来場者の減少のため、2023 年の閉館が決まった。ただし、約 70,000 点のコレクションがオークションにかけられた際には、レトロな食器類や容器にまでも高値がついた。

こうしたノスタルジアを見せる商業施設と社会主義の歴史を見せる博物館は設立の趣旨が異なる。私設博物館では、監視や弾圧といった社会主義の負の側面は後景化され、貧しくとも格差は現在ほど大きくなかったというノスタルジックな生活が再現される。他方、ベルリンのシュタージ博物館（Stasi-Museum）【写真 18】やライプツィヒの旧国家保安省記念館（Die Gedenkstätte Museum in der Runden Ecke）のような博物館においては、隠しカメラや盗聴器、密告者の記録などの実物が置かれ、記憶を単純化するのを防ぐ意図が見られる。反対に言えば、単純化させても問題にならない場面で模型が使われる。模型ではなくてもその当時、流通した商品を大量に配置することで当時の雰囲気を演出する方法もある。「東ドイツの世界」の展示の中でもコンズムの復元が有名だったのは、貧しい時代の楽しみであった食べ物のパッケージが、甘い記憶を呼び起こすためだといえる。

1970 年代の日本でもすでに古い時代の日用品がノスタルジア商品と見な

されていた。一見するとキッチンに見えるこれらの商品は、流行したのが過去であるという現在との距離感からキッチンではなく、魅力的なモノに映るという [Ivy 1995:56]。1959年の東京下町（設定は港区）の自動車修理工場を中心に物語が進む『ALWAYS 三丁目の夕日』（2005年）は過剰に昭和ノスタルジアを再現したものであるが、この映画のキッチュさは人々を魅了した。昭和30年代をテーマとした娯楽施設として1994年に開館した新横浜ラーメン博物館や、2002年に開設された台場一丁目商店街があり、多くの人々が訪れる場所となっている。1960年代から1980年代に開園した遊園地の多くは1990年代以降、次々と閉園していくが、西武園ゆうえんちは2021年、昭和30年代をテーマとしてリニューアルオープンした。「夕日の丘商店街」には駄菓子屋や雑貨店、喫茶店が並ぶ【写真19】。

青梅の昭和レトロ商品博物館【写真20】や大田区の昭和のくらし博物館、石川県の和倉昭和博物館とおもちゃ館【写真21】は、昭和の駄菓子やおもちゃを展示している。昭和レトロ商品博物館は串間努氏、昭和のくらし博物館は



写真19 西武園ゆうえんち



写真20 昭和レトロ商品博物館



写真21 和倉昭和博物館

小泉和子氏、和倉昭和博物館とおもちゃ観は広岡保氏のコレクションに基づく。青梅では昭和レトロ商品博物館を皮切りに昭和をテーマとした街づくりを進め、2005年には青梅駅が昭和レトロ調に改築された。昭和のくらし博物館に使用されている家屋は、小泉氏の父親である建築技師である小泉孝（1901-1982）が設計し、1951年に建てられた。住宅金融公庫の融資を受けると延床面積の上限が18坪に設定されたため、作り付けの家具や家具の置き場、部屋の板敷きなどに様々な工夫が凝らされた。周囲の住宅の改築が進む中で、小泉家住宅も建替えの話も出たが、研究者である小泉和子氏が住宅の維持を主張し、現在に至る。

昭和レトロ博物館や昭和のくらし博物館などが開館した1990年代には、愛知県西春日井郡師勝町（2006年、西春町と合併して北名古屋市となる）の郷土資料館が、昭和の日常を主軸とした展示へ移行し、入場者数を増やしていった【写真22】。この博物館は、当初、一般的な郷土資料館と同じように地元で出土した遺物の展示を行っていたが、1993年に「屋根裏の蜜柑箱は宝物」と題した企画展にて戦後の生活雑貨を展示したところ、評判となり、「小さな博物館を作る一街角博物館設立計画」（1995年）や「はじめて自転車に乗れたあの日」（1997年）など、特に昭和30年代のモノに焦点を当てた企画展を行い、開館10周年にあたる2000年には「ボクの知らない昭和時代」が開かれた〔朝日新聞1997年11月27日、朝日新聞2000年7月6日〕。

大分県豊後高田市の「昭和の町」は、昭和のモノの保存・展示という博物館的な機能と、テーマパーク的な機能を合わせた施設である【写真23】。2007年、豊後高田市が設立した豊後高田市観光まちづくり株式会社によって運



写真22 昭和日常博物館



写真23 豊後高田昭和の町



写真24 駄菓子屋の夢博物館

営される「昭和の町」は、主に駄菓子屋の夢博物館【写真24】や昭和の夢町三丁目などの施設が入る「昭和の蔵」と昭和30年代の建物を残した新町通り商店街および中央商店街から成る。昭和30年代をテーマにした町おこしは、日本各地でシャッター通りが増えた1990年代に始まる。豊後高田市の商工会議所は商業活性化委員会を設立し、商店街には最も栄えた昭和30年代の建物を利用することを決める。商店街は、店舗の看板や戸を木製に変えて昭和30年代の雰囲気を取り戻すと、2001年9月に「昭和の町」

オープニングセレモニーを開催した。翌年、福岡市早良区で「懐かし屋」を営む小宮裕宣氏を館長に迎え駄菓子屋の夢博物館を開館させた。建物は旧高田農業倉庫を改築して使用された。年間20万人の観光客が訪れ、2005年には昭和の絵本美術館、2008年には昭和の夢町三丁目館が開館した。

失われてゆく昭和の大衆的なモノを保存・展示することを目的とする博物館は、昭和のテーマパーク的な存在としても消費されている。テーマパークも壮大な模型であり、これに幼いころから親しんだ人々にとって、本物であるか、模型であるかという違いはそれほど大きな意味を持たない。アナハイムのディズニーランドがアメリカのノスタルジアを可視化したものであると同様に、昭和の町並みや生活を再現した昭和ノスタルジアが消費の対象とな

るのは当然の成り行きである。

4 ちゃぶ台の展示

東京都区立の郷土博物館には昭和 30 年代の生活再現展示が多く見られる。葛飾区郷土と天文の博物館を例に挙げると、パンフレットには以下のように概略が説明される。

かつしかルームの大型映像

葛飾区がたどった過去から現在までのあゆみ（軌跡）を、2つの番組で紹介。ジオでは東京低地が生まれた奇跡を、ヒトでは災害とともに生きてきた人々の奇跡の物語をお楽しみください。

昭和 30 年代の民家と工場

戦後の葛飾の花形産業であったボルト・ナット工場と昭和 30 年代の住居を再現。昭和 30 年代は葛飾の暮らしがもっとも激しく変化した時代だった。お茶の間のテレビ番組や当時の電化製品にも注目を。

荒川区立荒川ふるさと文化館では、①あらかわの原子、②あらかわの古代・中世、③あらかわの近世、④あらかわの近現代、⑤あらかわの暮らしと空間となっており、⑤で 1966 年頃の暮らしが再現される【写真 25】。

江戸川区郷土資料室には「昭和のくらし」として昭和 30 年代の茶の間が再現され、以下のような説明がある。

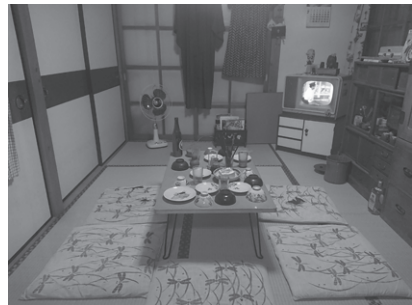


写真 25 荒川区立荒川ふるさと文化館

ここでは、昭和30年代（1955～）の一般家庭の「茶の間」の様子を再現しています。この頃は、「三種の神器」といわれた電気洗濯機・電気冷蔵庫・テレビのほか、さまざまな家電製品が広く普及した時期でした。家電によって、人々の生活は大きく変わっていきました。

どんな家族が、どんなくらしをしているのかが見えますか？！

こうした郷土博物館の昭和の展示のみをピックアップしたのが、豊島区立昭和歴史文化記念館（通称、昭和レトロ館）である【写真26】。パンフレットには以下のように「昭和のくらし～昭和40年頃の日常～」が記される。

かつての和室六畳間の生活を再現展示します。白黒テレビ、真空管ラジオ、電気炊飯器など、家電製品が広く普及したころの暮らしぶりをご覧ください。

茶の間と「三種の神器」、ちゃぶ台は、昭和の家族団らんのイメージを表してきたが、実際にちゃぶ台が使われた時期はそれほど長くはない。首都圏では1960年代後半からダイニングテーブルが普及し、ちゃぶ台は姿を消していった。ちゃぶ台は、大正から昭和期に普及した丸型あるいは角型の小型の食卓で、多くのものには折り畳める脚がついている。それは、食事が終わ



写真26 豊島区立昭和歴史文化記念館

ると折り畳んで部屋の隅にしまうことが前提となっているためである。ちゃぶ台が登場する前は、蓋と引き出しのついた箱膳のような一人用の食卓である膳が使われていた。引き出しの中に各自が用いる椀・皿・箸・湯呑茶碗が収納されていた。箱膳からちゃぶ台への移行は、生業や場所などの条件

に左右される。また、奉公人は1940年代でも箱膳を使用していたなど、ちゃぶ台と箱膳が共存した時期もあった〔西澤 2010:158〕。

ちゃぶ台および茶の間の普及は、江戸時代の身分制に基づく食卓から民主的な食卓への移行を象徴するものとして明治期の知識人たちによって奨励され、東京市内



写真 27 新宿区立新宿歴史博物館

の住宅の茶の間にちゃぶ台が置かれた〔石毛 2005〕。茶の間と応接室のあるモダンな文化住宅は、大正期から昭和初期のサラリーマンの憧れであった。客をもてなす洋室と私的な空間である和室を併存させた明治期の高級住宅を模して、一般の住宅にも洋風建築が取り入れられた。新宿歴史博物館では、このような昭和初期の文化住宅を再現している。間取りは、4 畳半の茶の間、6 畳の応接室、8 畳の居間となっている【写真 27】。

文化住宅という名前は、上野公園で開催された「平和記念東京博覧会」（1922 年 3 月 10 日～7 月 31 日）の文化村に由来する。モダンなどといった意味で使われ、文化住宅は当時の人々の憧れの住まいであった。「文化生活を営ふものゝために手頃の参考書」〔文化研究會研究部編 1923:2〕として刊行された『文化住宅の研究』には以下のように居間、茶の間、食堂について提案する。

居間の使ひ方であります、米國あたりの簡易な住宅では、居間が客間を兼ねて使用されてゐる場合があります。ところが日本では今日まで一般に居間と茶の間との區別が瞭かになつてゐなかつたやうに思はれます。厳密に言へば居間は家族の常に集つてゐる所で、茶の間は食事をする室でなければならぬのであります〔文化研究會研究部編 1923:12-13〕。

在来の日本住宅に食堂を強いて求めるならば、それは茶の間より外にはなからうと思ひます。しかしながら極めて、不統一のもので、主人はその居間で食事の膳に向ひ、子供達は茶の間でしますし、女中は臺所でといふやうに、夫々思ひ思ひで、一定はして居らないのであります。…これからの日本に於いても、次第に歐米風に準據した住宅が採用される時代に向かつて来たのでありますから、各家庭にも追々と食堂の設備が出来やうと思ひます〔文化研究會研究部編 1923:16-17〕。

このようにモダンな生活様式が推奨されたちょうどその時期、関東大震災が起こり、東京は壊滅的な被害を受けた。その復興の一環として1924年に設立された財団法人同潤会は、仮設住宅、集合住宅、分譲住宅を建設していった。同潤会は、1926年、青山アパートと中之郷アパートを建設し、その後、東京と横浜に計16のアパートを建設した。同潤会アパートが当時の東京の人々の憧れとなった様子は以下の記述から確認できる。

最近の貸家の傾向——軒立ちの家よりも近代的なアパートメントがます、流行の傾向で、内務省同潤會では現在市内外にアパート九個戸數二千二百八十七戸を算してゐるが、いずれも満員で容易には空かず新しく入りたいと思ふ人は一年位前から申込んで置かぬ限り借りることは不可能といふ景況〔東京朝日新聞 1929年5月1日〕。

普通住宅の急設と同時に、都心向住宅として、東京、横濱兩市に十五ヶ所に亘り、交通至便の地を買収してアパートメント約二千五百戸を建て、大正十五年九月から貸付を開始して居ります。建物は鐵筋コンクリート造二室乃至四室の世帯向のものを主とし、之に若干獨身向のものを配してありますが、其の態様に就ては本會の最も苦心を重ねましたところで、必ずしも歐米の例に倣はず、和洋を折衷し中産階級以下の實生活に適合するやう、又經費の許す限り最新の建築技術を應用し、耐震耐火的であるは勿

論、内部の設備は飽くまで居住者本意とし萬全を期しました結果、幸ひに各方面から異常の歓迎を受け借用申込者は常に殺到してゐる現状であります〔同潤会 1940:8-9〕。

同潤会に関する展示は渋谷区の郷土博物館の代官山アパートの再現と青山アパートの階段柱がある。また、世田谷区の郷土博物館には住宅展覧会用に作られた同潤会の経堂分譲住宅案内（1931 年）と駒沢分譲住宅案内（1932 年）の展示があり、「同潤会はアパートだけでなく」という説明が付けられている。1930 年代、山の手（目黒、新宿、渋谷、世田谷）で主に同潤会アパートが作った昭和モダンな住宅は、戦後まもなくして下町に広がり、その様子は葛飾や荒川、江戸川などの郷土博物館におけるちゃぶ台の展示につながってゆく。

こうしたちゃぶ台の展示には批判も見られる。江戸東京たてもの園における小寺醤油店は、小寺家が 1980 年代まで白金で営んでいた家屋を 1990 年に移築したものである。当時、ちゃぶ台は使われていなかったにも関わらず、和室にちゃぶ台が設置されたことについて、サンドは展示がノスタルジックに歪められていると批判する〔サンド 2009〕。また、青木俊也（2003）も茶の間に白黒テレビがある一家団らんを想像させる展示は、「貧しいけど明日への希望がある昭和 30 年代」というテーマパーク的な昭和の演出と類似するという〔青木 2003:84-88〕。

昭和 30 年代の庶民の生活様式は一つではないため、展示方法を決めるにはある一つの物語が必要である。松戸市立博物館の常盤平団地の展示では、東京に勤務するサラリーマンの家庭が物語として選ばれ、そこに配置される家電や日用品によって団地に住む人々のイメージを具現化した。常盤平団地の展示において、ちゃぶ台ではなくダイニングテーブルが置かれたのは、当時の洋風への憧れを表現するためだったという〔浅岡 2012:233〕。

昭和 30 年代の生活再現展示は、当時の人々が抱くモダンな生活への憧れと、現代の人々が抱く古きよき時代への憧れという二重の憧憬が絡み合う。

それは、「三種の神器」に代表される物質的な豊かさを得た代わりに精神的な豊かさを失ったというアンビバレントな感情である。このように見ると、近代化の過程で繰り返し起こる喪失感を埋める手段として、郷土への回帰が選ばれたのは当然の成り行きであった。喪失感を埋めるかのように何かを蒐集する趣味が広がる時期と、郷愁（ノスタルジア）が広まる時期はパラレルな関係にある。昭和の生活再現展示における商品に、人々が愛着を覚えるのは商品そのものへの記憶だけではなく、品質が画一的ではないキッチュなモノが喪失感を埋めてくれるかのように感じるからかもしれない。

おわりに

1980年代に起ったノスタルジアについて Robertson は以下のように述べている。「性差とジェンダー役割区分のイデオロギーは、ふるさとジャパンという未来へ帰るというイメージを暴く。“母親”とふるさとを結びつけることによって、社会評論家から自民党議員までノスタルジアにひたる男性たちは、戦後の国家形成の過程で排除してきたもの、すなわち、女性に付与された従属性と自己表現をしっかりと内包していると宣言できる。こうした男性たちは“古きよき時代”にノスタルジアを抱いているものの、まさに現在に生きているのである。」[Robertson 1997:99]

1968年から放送されたアニメ『巨人の星』に登場する星一徹にはちゃぶ台をひっくり返す強権的な父親のイメージがある。しかし一徹はちゃぶ台をひっくり返したのではない。アニメ第2話で、飛雄馬が大リーグ養成ギブスを誰にも見せてはいけないという約束を破った上、父親に嘘をついたので、一徹は激しく怒った。この出来事の前に明子が食事の準備をしながら家族で語らう場面がある。

明子「こうして一家そろって朝ごはんを食べるなんてめったになかったわね」

飛雄馬「なにしろ誰かさんは毎朝二日酔いだったからな」

明子「死んだお母さんもきつとよろこんでるわ」

飛雄馬「へへへへ、照れるなよ、父ちゃん。どう、酒飲まないと飯うまいだろ」

一徹「こいつう」

明子・飛雄馬「あははは」

この後、不良番長の赤川が星家にやってきて、ギブスを付けたために肘と肩を痛めたとクレームをつける。そして一徹がちゃぶ台をひっくり返すという流れになる。ドラマ『寺内貫太郎一家』（1974年）も同様である。こたつテーブルで食事をとる最中に貫太郎と長男の周平は取っ組み合いの喧嘩を繰り返すが、テーブルをひっくり返すことはなく、喧嘩の邪魔にならないように家族がテーブルを片付ける。頑固おやじのちゃぶ台返しは後の時代になって様々な形で再現された昭和のパロディに近い。レトロアート館のひっくり返されたちゃぶ台もまた、権威主義を連想させる昭和の家父長制ではなく、昭和のパロディとして享受される。ちゃぶ台は円形だけではなく、四角形のものも多数があったが、昭和の展示において用いられるちゃぶ台はほとんどが丸い。こうした角のない小さなテーブルが、昭和の甘美なノスタルジアを作り出しているのである。

本研究は科研費基盤B「『模する』技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（19H01395、代表：野口直人）の助成を受けた。

参考文献

- 青木俊也「昭和三十年代生活再展示とノスタルジアにみるフォークロリズム的状况」『日本民俗学』236、2003年、82-91ページ。
- 青柳憲昌「関野克の登呂遺跡住居復原案の形成過程と“復元”の基本方針」『日本建築学会計画系論文集』75（654）、2010年、2070-2080ページ。

- 浅岡隆裕『メディア表象の文化社会学：〈昭和〉イメージの生成と定着の研究』ハーベスト社、2012年。
- 石毛直道『食卓文明論：チャブ台はどこへ消えた？』中公叢書、2005年。
- 市川孝一「昭和30年代はどう語られたか：“昭和30年代ブーム”についての覚書」『マス・コミュニケーション研究』76、2010年、7-22ページ。
- 香川雅信「郷土玩具のまなざし：趣味家たちの「郷土」」『日本民俗学』236、2003年、119-126ページ。
- 片桐新自「“昭和ブーム”を解剖する」『関西大学社会学部』38(3)、2007年、43-60ページ。
- 加藤幸治「郷土玩具概念再考：物質文化へのまなざしと様々なコンセプト」『日本民俗学』256、2008年、1-26ページ。
- サンド、ジョルダン「ちゃぶ台論をひっくり返す：小寺家の食習慣」『美術フォーラム21』20、2009年、47-50ページ。
- 島津俊之「郷土概念と初等地理教育の偶有的接合：明治19年「小学校ノ学校及其程度」をめぐって」『空間・社会・地理思想』13、2010年、19-37ページ。
- 高野光平『昭和ノスタルジー解体：「懐かしさ」はどう作られたか』晶文社、2018年。
- 多木浩二『眼の隠喩：視線の現象学』ちくま学芸文庫、2008年。
- 武井武雄『日本の郷土玩具 東の部・西の部』金星堂、1930年。
- 棚橋源太郎『眼に訴へる教育機関』宝文館、1930年。
- デービス、フレッド『ノスタルジアの社会学』世界思想社、1990年。
- 寺尾久美子「“昭和30年代”の語られ方の変容」『哲學』117、2007年、157-176ページ。
- 成田龍一『「故郷」という物語：都市空間の歴史学』吉川弘文館、1998年。
- 野瀬泰申『食品サンプルの誕生』ちくま文庫、2017年。
- 西澤治彦「銘々膳からちゃぶ台へ」『武蔵大学人文学会雑誌』41(2)、2010年、117-167ページ。
- 日高勝之『昭和ノスタルジアとは何か：記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』世界思想社、2014年。
- 室井康成「構築される“郷土”観：柳田国男における概念化の意義をめぐって」『文化科学研究』2、2006年、98-114ページ。
- 箕作佳吉「博物館ニ就キテ」『東洋学藝雑誌』16(215)、1899年、315-320ページ。
- 南夏樹「博物館のディオラマ」『IS : Panoramic magazine : Intellect & sensitivity』87、2002年、69-71ページ。
- 吉見俊哉『視覚都市の地政学：まなざしとしての近代』岩波書店。

- Creighton, Millie 1997 “Consuming rural Japan: The marketing of tradition and nostalgia in the Japanese travel industry,” *Ethnology*, 36 (3):239-254.
- Ghodsee, Kristen 2004 “Red Nostalgia?: Communism, Women’s Emancipation and Economic Transformation in Bulgaria,” *L’Homme*, 15 (1):23-36.
- Ivy, Marilyn 1995 *Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan*, Chicago.
- Kelly, William 1986 “Rationalization and Nostalgia: Cultural Dynamics of New Middle-Class Japan,” *American Ethnologist*, 13 (4):603-18.
- Light, Duncan 2000 “Gazing on Communism: Heritage Tourism and Post-Communist Identities in Germany, Hungary and Romania,” *Tourism Geographies*, 2 (2):157-176.
- Robertson, Jennifer 1997 “Empire of Nostalgia: Rethinking ‘Internationalization’ in Japan Today,” *Theory, Culture and Society*, 14 (4): 97-122.
- Velikonja, Mitja 2008 “‘Red Shade’: Nostalgia for Socialism as an Element of Cultural Pluralism in the Slovenian Transition,” *Slovene Studies*, 30 (2):171-184.

新聞

- 「複影畫堂之廣告」『東京朝日新聞』1890年5月20日
- 「パノラマ館廣告五月廿二日開場」『東京朝日新聞』1890年5月20日
- 「素晴らしいアパートの人気」『東京朝日新聞』1929年5月1日
- 「御下賜公園に郷土博物館」『東京朝日新聞』1934年1月7日
- 「アパート住いは茲に魅力あり…か」『東京朝日新聞』1936年5月7日
- 「東京の姿態 (24) / 建築の巻 / 生活の簡易化」『東京朝日新聞』1937年3月2日
- 「“東京むかしむかし”を勉強 武蔵野郷土館で小、中学生達」『朝日新聞』1953年11月8日
- 「武蔵野郷土館 行楽ガイド」『朝日新聞』1963年5月14日
- 「世田谷区に郷土資料館」『朝日新聞』1964年9月8日
- 「古文書から農具まで 府中郷土館4月に店開き」『朝日新聞』1968年3月16日
- 「街角にさえるニセの技」『朝日新聞』1983年10月28日
- 「昭和のモノ 6000点を50音巡り 師勝町の資料館で特別展」『朝日新聞』1997年11月27日
- 「城 町・村おこしはコレに限る 全国で建築ラッシュ 専門家は苦虫」『読売新聞』1991年4月21日
- 「懐かしき昭和の日常 師勝町歴史民俗資料館で特別展」『朝日新聞』2000年7月6日
- 「【私と東京】昭和レトロ商品博物館館長・横川秀利さん 人が支え合い商店街復活を」『産経新聞』2000年9月26日
- 「[街の道] 旧青梅街道・住江町商店街 名画が呼び戻した活気」『読売新聞』2002

年7月30日

「“昭和”ブーム 夢と希望に満ちた時代 おまけ、ビール、“街”…続々復活」『産経新聞』

2002年10月21日

「食品サンプル“観光資源に” 八幡町で新たな試み」『朝日新聞』2004年1月12日

「昭和レトロ調に変身 JR 青梅駅」『産経新聞』2005年3月3日

「昭和博物館が28日に開館 七尾・和倉温泉＝石川」『読売新聞』2007年4月19日

「体験型産業観光紹介HPを開設」『朝日新聞』2007年8月2日

「食品サンプル さんぶる工房 郡上市八幡町」『朝日新聞』2008年9月7日

「パフェ、かき氷 サンプルづくり 常滑、親子ら体験」『中日新聞』2008年7月30日

ウェブサイト

株式会社いわさき <https://www.iwasaki-ts.co.jp/> (2023年8月4日最終アクセス)

さんぶる工房 <https://samplekobo.com/> (2023年8月3日最終アクセス)

丹青社 <https://www.tanseisha.co.jp/> (2023年8月8日最終アクセス)

トータル・メディア開発研究所 <https://www.totalmedia.co.jp/> (2023年8月8日最終アクセス)

乃村工藝社 <https://www.nomurakougei.co.jp/> (2023年8月8日最終アクセス)

その他

文化研究会研究部編『文化住宅の研究』文化研究会、1923年。

『地域づくり読本』地域活性化センター、1998年。

『同潤会と其の事業』同潤会、1940年。

『港区立郷土歴史館 常設展示図録』2021年。

[亜細亜大学国際関係研究所規程]

(2021 年 2 月 22 日、教授会決定)

(名称)

第 1 条 亜細亜大学学則第 9 条第 2 項に基づき、亜細亜大学国際関係学部¹に亜細亜大学国際関係研究所 (Research Institute for International Relations, Asia University) (以下「本研究所」という) を附置する。

(目的)

第 2 条 本研究所は、国際関係に関連する分野を研究、調査し、学術の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第 3 条 本研究所は、第 2 条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 研究会、講演会等の開催
- (2) 所員の研究活動の助成
- (3) 海外の研究機関、研究者との交流
- (4) 機関誌『国際関係紀要』、その他の発行
- (5) その他、本研究所の目的達成に必要な事業

(構成)

第 4 条 本研究所は、次のものをもって構成する。

- (1) 所長
- (2) 所員

(所長)

第 5 条 所長は、本研究所を統括し、これを代表する。

2. 所長は、国際関係学部教授会が教授の中から選出する。
3. 所長の任期は 2 年とする。ただし、重任を妨げない。
4. 所長が任期中に辞任したときは、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

(所員)

第 6 条 所員は、国際関係学部の専任教員とし、第 2 条の目的に添う研究、調査を行い、研究成果を機関誌に発表する。

(所員会議)

第 7 条 所員会議は、毎年 1 回開催する。ただし、所長は必要に応じて、臨時に招集することができる。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会を設け、運営に関する事項を審議する。

2. 運営委員会は、所長を議長とし、所員会議で承認された運営委員若干名で構成する。

3. 運営委員の任期は、2年とする。ただし、重任を妨げない。

(編集委員会)

第9条 第3条第4号の事業（機関誌、その他の発行）を行うための編集委員会を置く。

(会計)

第10条 本研究所の運営は、大学からの補助金、寄付金、およびその他の収入による。

(事業報告)

第11条 本研究所の事業年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日までとし、事業報告を所員会議に提出するものとする。

(規程の改正)

第12条 本研究所規程の改正は、所員会議において出席者の過半数の同意を得て決定するものとする。

(付則)

本規程は、2021年4月1日から施行する。

『国際関係紀要』投稿規程

(2017 年 7 月 27 日改訂)

1. 投稿資格

- (1) 本紀要への投稿者は、亜細亜大学国際関係研究所の所員であること。
- (2) 共著論文を投稿する場合には、前項に定める所員が第一著者であること。

2. 紀要論文の掲載要件

- (1) 本紀要に掲載する論文は、国際関係分野の研究もしくは教育に関するものであること。
- (2) 投稿論文に対して匿名審査員による審査を行い、掲載の可否を決定する。

3. 原稿の形式

- (1) 原稿は横書きとする。
- (2) 原稿はワープロまたはパソコン入力・印刷したもの（40 字 × 40 行、英文はダブルスペースで 80 字 × 25 行）を 1 部提出する。
- (3) 審査を経て投稿が決定したあとは、電子ファイルで提出する。
- (4) 注は、通し番号による一括後注方式かハーヴァード方式とする。

4. 原稿枚数等

- (1) 原稿の枚数は、以下の通りとする。

①論文

- (a) 日本語原稿は、20,000～32,000 字程度（図表等を含む。以下同じ）。
- (b) 英文原稿は、5,000 ワード程度～13,000 ワード程度。

②研究ノート

- (a) 日本語原稿は、16,000 字程度。
- (b) 英文原稿は、4,000 ワード程度。

③書評（書評論文と書評を統合）

- (a) 日本語原稿は、8,000～12,000 字程度。
- (b) 英文原稿は、2,000 ワード程度～4,800 ワード程度。
- (c) 対象となる書籍は、特に歴史的かつ文献学的意味を持たない限り、原則として執筆時に発行年より 5 年を経過していないものとする。

④研究動向（資料と通信）

- (a) 日本語原稿は、2,000～4,000 字程度。

(b) 英文原稿は、1,000 ワード程度。

(c) 近年の研究動向を紹介する。

⑤国際関係分野の教育

(a) 日本語原稿は、2,000～12,000 字程度。

(b) 英文原稿は、1,000 ワード程度。

(c) 国際関係分野の教育実践例などを紹介する。

⑥その他、国際関係研究所運営委員会が投稿を可とした原稿

(a) 日本語原稿・英語原稿ともにとくに文字数は定めない。

(b) 投稿予定者は、事前に運営委員会に相談の上、投稿の許可を得る必要がある。

- (2) 日本語原稿には、英文要旨を添付して提出する。英文要旨の長さは、論文、研究ノート、書評、研究動向、国際関係分野の教育、その他の原稿のいずれについても、500 ワード以内（厳守）とする。ただし、論文以外については、英文要旨を省略してもよい。

5. 著作権

- (1) 本紀要に掲載された論文等の著作権は、著作者本人に帰属する。
(2) 第1項に関わらず、国際関係研究所は本紀要に掲載された論文等を電子化し、それを公表する権利を有し、著作者はこれを許諾するものとする。

6. 別刷り

採用された原稿には、別刷り 50 部を無料で進呈する。

7. その他

その他の場合は、必要に応じて編集委員会が指示する。

前号（第32巻 第2号）目次

御退職される二先生を送る……………	国際関係学部長 三橋 秀彦
江川先生を送る……………	新井 敬夫
永網憲悟先生をお送りする言葉……………	伊藤 裕子

論 文

現代シリアにおけるパルミラ監獄経験の表象 ——ムスリム同胞団員手記にみる〈意味のレジリエンス〉—— ……………	岡崎 弘樹
大学学部留学生のための専門日本語学習支援 ——日本語教師による困難語予測に焦点を当てて——……………	小竹 直子
「危険な伝染病」の保菌者 ——日本人移民と20世紀転換期のアメリカ公衆衛生——……………	今野 裕子
Transgressive Desire: A Comparison Between the Subversive Thoughts of Oscar Wilde and the Role of Inconsistency in the Orientalist Works of Pierre Loti ……………	Peter TURBERFIELD
国際連合の人権条約機関による新たな権利の発展 ——先住民族の権利に着目して——……………	富田 麻理

研究ノート

エステル・デイヴィッド『 <i>Book of Esther</i> 』とインドのベネ・イスラエル II ……………	小磯 千尋
銅像が示す地域性：戦国武将の銅像を中心に……………	高山 陽子
ブーチンのウクライナ戦争——暫定的資料整理の試み……………	永網 憲悟

2023（令和5）年度国際関係研究所研究会

今年度は以下の通り2回の研究会を開催した。

1. 第1回研究会

開催日：2023（令和5）年7月27日

講演者及び講演タイトル：

- （1）岡崎弘樹専任講師「現代シリアの「市民社会」構想～研究課題全体のなかの位置づけ～」
- （2）小河久志准教授「自然災害の長期性に関する人類学的研究—タイ南部インド洋津波被災地の事例—」

2. 第2回研究会

開催日：2024（令和6）年1月28日

講演者及び講演タイトル：

- （1）千波玲子教授「CEFR, CLIL & COIL」
- （2）小井土彰宏教授「合衆国・メキシコの移動規制レジームの共時的転換—トランプ～バイデン期の境界の重層的再構成」

〔編集後記〕

『国際関係紀要』第33巻第1・2合併号をお届けします。

今号には、研究ノート2本が寄せられました。江川・永綱両先生の退職記念号となった前号に多くの先生がご寄稿くださったからか、学外の学術雑誌へ投稿される先生が増えたからか、今年度は日々の業務が忙しく研究に費やす時間が十分に取れなかったからかは分かりませんが、ご寄稿が少なかったことが残念です。個人的には、「研究者である以上、どんなに忙しかったとしても年に最低1本の論文を書く」という恩師の言葉を忘れずに研鑽し続けたいと思います。

今号の研究ノート2本からは、大変貴重な新たな視点を学ばせていただきました。小磯先生、高山先生、ありがとうございました。

今号も、紀要編集委員長の新井先生、研究所幹事の角田先生、前編集担当の大野先生、論文の査読に快くご協力くださった先生方、所管事務部署の方々、松籟社の木村浩之さんをはじめ、多くの方々のおかげで無事に刊行することができました。心より御礼申し上げます。

今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

（編集担当 秋月弘子）

【紀要編集委員】（○印…委員長）

○新井 敬夫 角田 宇子 秋月 弘子 大野 亮司
川中 豪 小井土彰宏 増原 綾子

【執筆者紹介】（執筆順）

教 授 小磯千尋（インド思想史、南アジアの地域研究）
教 授 高山陽子（文化人類学）

国際関係紀要 第33巻 第1・2合併号

2024年3月20日発行

編集者
発行者 亜細亜大学国際関係研究所

〒180-8629

東京都武蔵野市境5-8

電話 0422（36）7379～80

制 作 松籟社

〒612-0801

京都府京都市伏見区深草正覚町1-34

電話 075（531）2878

**JOURNAL OF
INTERNATIONAL RELATIONS**
ASIA UNIVERSITY

VOL.33

March 2024

No.1/2

RESEARCH NOTES

Book of Esther by Esther David and Bene-Israel in India. Chihiro KOISO (1)

Chabudai and Showa Nostalgia Yoko TAKAYAMA (29)

**RESEARCH INSTITUTE FOR
INTERNATIONAL RELATIONS
ASIA UNIVERSITY
TOKYO, JAPAN**